Olympic

# オリンピック教育

Vol.11 2022/04-2023/03

Education

CORE
Centre for Olympic Research and Education

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

# 目次


## はじめに

第 11 巻刊行にあたって ..... 真田　久 ... 2

## 研究・活動報告

東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2022 年度） .... 宮崎　明世 ... 3

2023 年度スポーツ庁オリパラ・ムーブメント・ネットワーク会議への参画について ..... 大林　太朗 ... 9

国内ユースフォーラム 2022 － TOKYO2020 のレガシーへの協力 ..... 中塚　義実 ... 10

## 実践報告

附属小学校 ..... 齋藤　直人 ... 13

附属中学校 ..... 秋山　和輝 ... 15

附属高等学校 ..... 鮫島　康太 ... 19

附属駒場中・高等学校 ..... 山合　洋人 ... 21

附属坂戸高等学校 ..... 野村　拓也、中村　咲野 ... 24

附属視覚特別支援学校 ..... 山本　夏幹 ... 26

附属聴覚特別支援学校 ..... 荒川　郁朗 ... 27

附属大塚特別支援学校 ..... 宇佐美太郎 ... 30

附属桐が丘特別支援学校 ..... 寒河江　核 ... 33

附属久里浜特別支援学校 ..... 遠藤　佑一 ... 35

# はじめに

## 第 11 巻刊行にあたって

筑波大学特命教授、CORE 事務局長　　真田 久

筑波大学及び附属学校におけるオリンピック・パラリンピック教育が盛んになったのは、元附属学校教育長の故阿部生雄先生の功績によるものです。そのことを紹介させていただきたいと思います。

2001 年から 3 年間、阿部生雄先生（当時体育科学系教授）は、スイス・ローザンヌにある IOC オリンピックミュージアムの委員になられ、オリンピックに関する助成研究の選考の仕事をされていました。世界のオリンピック研究の中で、オリンピック教育についての話題が、委員の間でしばしば出されていたようでした。

筑波大学では、総合科目「五輪講座」が、大学生に対するオリンピック教育として 2003 年度から始められていました。この総合科目の受講生が当時のジャック・ロゲ IOC 会長に手紙を出したことがきっかけで、2006 年 10 月 20 日、ロゲ会長が筑波大学を訪問、名誉教授の称号を授与することになりました。その少し前から、東京でオリンピックの開催を、という意思表示が石原都知事により表明されたこともあり、また産経新聞で五輪講座の内容が掲載され続けたこともあって、筑波大学の五輪講座は注目されるようになりました。しかしながら、オリンピック教育は大学生のみが対象で、本丸の小中高・特別支援学校にまで広げる手段はありませんでした。それを開いてくれたのが阿部先生でした。

2003 年 4 月に、阿部先生は母校でもある筑波大学附属中学校の校長に就任されると、附属中学校伝統の「校長訓話」で、スポーツマンシップやオリンピックの話題を取り上げることが多くあったようです。例えばスポーツマンシップについて、「真の人格の高さは、どのように勝利するか、どのように敗北を受け入れるかに現れるのであり、単に勝つことにあるのではない。スポーツマンシップとは、労働の恩恵と遊戯の喜びを高めるその資質のことである。」「人類、個人、国家、国際という次元のすべての活動において人生のゲームをフェアーに行うよう奨励すること」である、と語られています（『みなさん、こんにちは−向上心への呼びかけ−』（2008 年、図書文化）。スポーツの持つ価値に思いを馳せた生徒も多かったことと思います。

そして、2009 年 4 月に阿部先生は理事・附属学校教育局教育長に就任されると、大学と附属学校との連携によるオリンピック教育を一気に進めることに着手されました。筑波大学の第二期中期目標・中期計画に係る大学全体の年次別実行計画の中で、2010 年度と 2011 年度に「大学と連携し、小学校教員養成課程を含む教師教育の充実及びオリンピック教育の実施を検討」するとし、重点施策として「大学と連携し、附属学校の児童生徒を対象とする国際平和教育としてのオリンピック教育の実施を検討する」ことを掲げられました。上記の中期計画に基づき、11 の附属学校と大学との連携、そして小中高大一貫で、国際理解教育としてオリンピック教育を推進することが構想されたのです。

こうした事業を計画的、継続的に行うためには、オリンピックに関する研究と教育のための中核的な機関を大学に設置しなければならないということも、阿部先生と私との構想に入っていました。河野一郎先生の助言もあり、2010 年 8 月 5 日に山田学長から IOC のロゲ会長に CORE 設立に関する協力依頼の手紙を出していただき、「オリンピック」という名称の使用と設立に関する理解と協力の確約を得ました。それを受けて、2010 年 12 月 10 日、嘉納治五郎像の除幕式とともに、CORE（Centre for Olympic Research and Education）が設立されました。CORE は IOC オリンピック研究センター傘下の研究センターとして承認されました。

CORE は、附属学校のオリンピック教育推進専門委員会と連携し、東京 2020 大会に際しても、スポーツ庁のオリンピック・パラリンピック教育事業を 2015 年度から 2021 年度まで受託し、全国のオリパラ教育を推進しました。また、2021 年 9 月には、第 3 回となるオリンピック研究センターの国際会議、The 3rd International Colloquium of Olympic Studies and Research Centres を主催者として IOC と共に、オンラインにて開催しました。オリパラ教育の全国展開では、附属学校の事例や成果も発信され、推進力になりました。こうしたオリンピック教育の推進は、阿部先生なくしては実現できなかったものです。厚く感謝申し上げたいと思います。

東京 2020 大会が終わった現在、CORE は新たな名称で今年、出発する予定です。筑波大学や附属学校におけるオリンピックやパラスポーツに関する教育の更なる発展を期待したいと思います。

# 東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2022 年度）

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム・筑波大学体育系准教授　　宮崎 明世

## Ⅰ．はじめに

東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けて、全国各地でオリンピック・パラリンピック教育（オリ・パラ教育）が進められた。大会に向けた学校におけるオリ・パラ教育は、当初から大会後にレガシーとなるような教育活動とすることが方針として示された（文部科学省，2016；東京都教育委員会，2016）。開催都市である東京都はもとより、全国に向けてはスポーツ庁の事業が展開されたが、教育活動の成果と大会後の教育活動の実態については大会終了後に継続的に調査し、明らかにする必要がある。そこで、東京 2020 大会に向けて行われた学校におけるオリ・パラ教育について、大会終了後の実態と大会および教育活動の影響を明らかにすることを目的として調査を行った。以下に調査結果を報告する。

## Ⅱ．方法

### 1．対象

本調査では、スポーツ庁のオリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業に参加した 3 つの自治体（A 県、B 県、C 県とする）の公立小・中・高・特別支援学校を対象とした。

A 県は関東地方に位置し、2017 年度と比較的早い時期から事業に参加した。大会開催年度には 29 校が推進校に指定され、3 県の中では最も多かった。回答数は 466 校で県内の公立学校の 57.4%が回答した。B 県は甲信越地方に位置し、2019 年度から事業に参加した。推進校数は 10 校程度と多くはなかったが、大会前には、地域の特性を活かした教育活動を展開しており、大会終了後もパラスポーツを中心に教育活動を継続する方針を示している。回答数は 401 校で県内の公立学校の 62.0%が回答した。C 県は中国地方に位置し、2018 年度から事業に参加した。推進校数は 5 ～ 10 校と少なかったが、県の教員研修にオリ・パラ教育を取り入れるなど、大会に向けて普及活動に熱心に取り組んだ。回答数は 179 校で県内の公立学校の 34.5%が回答した。

### 2．調査期間とデータの収集

調査期間は 2022 年 9 月～ 10 月であった。各県の教育委員会を通して調査を依頼し、Google フォームを用いたオンラインによる調査を行った。質問項目は、オリ・パラ教育の実態として、2021 年度まで（大会前）のオリ・パラ教育の実践、2022 年度（大会後）の教育実践の有無、内容、実施しない理由、必要な支援等を尋ねた。また、オリ・パラ教育の影響として、大会開催以降の児童生徒の変化、学校の取り組みの変化、地域や教員間の変化などについて尋ねた。

## Ⅲ．結果

### 1．2021 年度まで（大会前）のオリ・パラ教育の実践について（表 1）

まず初めに、大会が開催された 2021 年度までに全国展開事業の推進校に指定されたことがあるかどうか尋ねたところ、指定を受けたことがあるのは A 県 12.9%、B 県 3.0%、C 県 5.0%で、最も指定校数の多かった A 県でも 87.1%の学校が、指定校数の少なかった B 県では 97.0%、C 県では 95.0%の学校が指定を受けたことがなかった。対象校のほとんどが、推進校の指定を受けたことがなかったことが示された。

次に、大会開催年度までにオリ・パラ教育を行ったかどうかについて尋ねたところ、A 県 65.9%、B 県 63.3%、C 県 58.7%

表 1．2021 年度までのオリ・パラ教育の実践について

| | A県（n=466） | | | | B県（n=401） | | | | C県（n=179） | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 推進校の指定の有無 | ある | | ない | | ある | | ない | | ある | | ない | |
| | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| | 60 | 12.9 | 406 | 87.1 | 12 | 3.0 | 389 | 97.0 | 9 | 5.0 | 170 | 95.0 |
| 2021年度にオリ・パラ教育活動を行ったか | 行った | | 行っていない | | 行った | | 行っていない | | 行った | | 行っていない | |
| | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| | 307 | 65.9 | 159 | 34.1 | 254 | 63.3 | 147 | 36.7 | 105 | 58.7 | 74 | 41.3 |

が「行った」と回答した。対象の大半が推進校の指定を受けたことがなかったにもかかわらず、6 割前後の学校が大会開催までにオリ・パラ教育を行っていた。その反面、県によって差はあるものの 4 割前後はオリ・パラ教育を行っていなかったことになり、全国的な取り組みとしてはその普及は十分とは言えない結果であった。

**2. 今年度（2022）のオリ・パラ教育の実践について**

**2–1. 2022 年度のオリ・パラ教育の実践（表 2）**

大会後である 2022 年度に、オリ･パラ教育を行ったかどうかを尋ねたところ、「既に行った、今後行う予定がある」（行った･行う予定がある）と回答したのは A 県 50.9%、B 県 55.2%、C 県 55.9%であった。すべての地域において、大会が終わった今年度も半数を超える学校が教育活動を行う（または行う予定がある）ということであった。このうち、昨年度までに教育活動を行った学校の A 県 62.9%、B 県 84.7%、C 県 81.9%が、今年度も「行った・行う予定がある」と回答した。地域によって差があったが、2 つの地域では 8 割を超える学校が教育活動を継続していた。また、昨年度までに教育活動を行っていない学校の A 県 17.0%、B 県 16.2%、C 県 18.9%が、今年度「行った・行う予定がある」と回答した。前年度までの活動の有無が、今年度の活動に影響を与えると考えられるが､大会前までに活動を行っていなくても新たに取り組む（予定がある）例が認められ、各地域で 2 割前後に登ることが明らかとなった。

今年度の活動内容について、これまでに行った活動かどうかを尋ねたところ、「昨年度までに行った活動の継続」は A 県 61.8%、B 県 53.1%、C 県 61.5%、「活動を修正･発展させて行う」は A 県 33.9%、B 県 21.5%、C 県 27.1%、「今年度新たに行う」は A 県 14.1%、B 県 28.2%、C 県 12.5%であった。昨年度までの活動の継続、または発展させて行う学校が多かったが、新たに取り組む活動もあることが分かった。

表 2. 今年度のオリ・パラ教育の実践

| | A県 | | | | | | B県 | | | | | | C県 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 今年度のオリ・パラ教育の実践（複数回答可） | 既に行った | | 今後予定がある | | 行う予定はない | | 既に行った | | 今後予定がある | | 行う予定はない | | 既に行った | | 今後予定がある | | 行う予定はない | |
| | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| | 79 | 17.0 | 158 | 33.9 | 249 | 53.4 | 78 | 19.5 | 143 | 35.7 | 198 | 49.4 | 36 | 20.1 | 64 | 35.8 | 85 | 47.5 |
| 教育活動の継続性 | 活動を継続 | | 活動を修正･発展 | | 今年度初めて | | 活動を継続 | | 活動を修正･発展 | | 今年度初めて | | 活動を継続 | | 活動を修正･発展 | | 今年度初めて | |
| | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| | 136 | 61.8 | 65 | 29.5 | 31 | 14.1 | 111 | 53.1 | 45 | 21.5 | 59 | 28.2 | 59 | 61.5 | 26 | 27.1 | 12 | 12.5 |
| | n=220 | | | | | | n=209 | | | | | | n=96 | | | | | |

**2–2. 具体的な活動内容（表 3）**

具体的な活動内容について尋ねたところ､全体の合計が最も多かったのは｢パラスポーツ体験｣(I'mPOSSIBLE､ブラインドサッカー、車いすバスケ等）で、今年度教育活動を実施した（または今後行う）学校の A 県 15.9%、B 県 34.4%、C 県 28.1%で行われた。次に「ボッチャ」の体験や交流が A 県 10.0%、B 県 24.9%、C 県 13.5%、「知識･調べ学習」が A 県 17.7%、B 県 8.1%、C 県 12.2%で行われた。「知識･調べ学習」の内容は歴史や競技、大会の意義などに関する学びが挙げられた。そのほかには「体育理論」、「保健体育の授業」、国語や外国語、総合的な学習の時間「各教科の授業」、「道徳」、「人権・福祉教育」、「学校行事」などが各地域に共通して行われた活動であった。東京 2020 に向けたオリ・パラ教育の内容では、パラスポーツ、特にボッチャの体験や実践が多く行われていたことが特徴の一つと言える。保健体育以外にも国語や総合的な探求などの授業で活用されており、さらに道徳や人権教育といった学習においても活用された。活動の内容は多岐に渡ったが、B 県は大会後にパラ教育活動を継続する方針を示しており、それを反映した形で他県よりもパラスポーツの取り組みが多かった。

**2–3. 今年度オリ・パラ教育を実践しない理由（表 4）**

今年度オリ・パラ教育を実践しないと回答した学校に対して、その理由について尋ねたところ、すべての地域に共通して最も多かった回答は、「時間の確保が困難」（他に優先すべきことがある、行事を精選した、他の活動にあてる）で、A 県 34.9%、B 県 37.4%、C 県 23.5%であった。次いで、「オリ・パラが終わったから」が A 県 8.8%、B 県 10.1%、C 県 5.9%、さらに「年間計画に位置付けていない」、「コロナ対策による実践の困難」、「何をしたらよいかわからない」、「教材がない」、「必要性を感じない」、「理解不足」などの回答があった。

大会が終了して、これまでにオリ・パラ教育にあてていた時間を他の活動にあてるという学校が多いことが明らかとなり、

表 3. 今年度行った活動内容

| カテゴリー | 内容例 | A県（n=220） | | B県（n=209） | | C県（n=96） | | 合計（n=525） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| パラスポーツ | 体験、I'mPOSSIBLE、ブラインドサッカー、車いすバスケ等 | 35 | 15.9 | 72 | 34.4 | 27 | 28.1 | 134 | 25.5 |
| ボッチャ | 体験、交流 | 22 | 10.0 | 52 | 24.9 | 13 | 13.5 | 87 | 16.6 |
| 体育・保健体育授業 | | 28 | 12.7 | 7 | 3.3 | 7 | 7.3 | 42 | 8.0 |
| 体育理論 | | 22 | 10.0 | 23 | 11.0 | 10 | 10.4 | 55 | 10.5 |
| その他授業 | 国語、総合的な学習、外国語 | 24 | 10.9 | 6 | 2.9 | 9 | 9.4 | 39 | 7.4 |
| 知識・調べ学習 | 歴史や競技、大会そのもの | 39 | 17.7 | 17 | 8.1 | 8 | 8.3 | 64 | 12.2 |
| 道徳 | | 23 | 10.5 | 8 | 3.8 | 11 | 11.5 | 42 | 8.0 |
| 学校行事 | 音楽祭、講演 | 7 | 3.2 | 4 | 1.9 | 2 | 2.1 | 13 | 2.5 |
| 講演 | オリンピアン、パラアスリート | 5 | 2.3 | 9 | 4.3 | | | 14 | 2.7 |
| 人権・福祉教育 | | 4 | 1.8 | 4 | 1.9 | 3 | 3.1 | 11 | 2.1 |
| 体験・スポーツ体験 | | 2 | 0.9 | 4 | 1.9 | | | 6 | 1.1 |
| 交流 | | 3 | 1.4 | | | | | 3 | 0.6 |
| その他<br>給食、掲示、映像の視聴、ニュースポーツ体験、あいさつ運動、ボランティア、イベント参加、多様性の理解、自己実現 | | | | | | | | | |

表 4. オリ・パラ教育を実践しない理由（上位抜粋）

| カテゴリー | 記述内容 | A県（n=249） | | B県（n=198） | | C県（n=85） | | 合計（n=532） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| 時間の確保が困難 | 他に優先すべきことがある、行事の精選、他の活動にあてる | 87 | 34.9 | 74 | 37.4 | 20 | 23.5 | 181 | 34.0 |
| オリパラが終わったから | | 22 | 8.8 | 20 | 10.1 | 5 | 5.9 | 47 | 8.8 |
| 年間計画に位置付けていない | | 18 | 7.2 | 24 | 12.1 | 1 | 1.2 | 43 | 8.1 |
| コロナ対策による困難 | | 20 | 8.0 | 9 | 4.5 | 4 | 4.7 | 33 | 6.2 |
| 教育課程への位置づけが不明確 | | 4 | 1.6 | 8 | 4.0 | - | | 12 | 2.3 |
| 何をしたらよいかわからない | 活動が不明 | 3 | 1.2 | 8 | 4.0 | 1 | 1.2 | 12 | 2.3 |
| 教材がない | | 5 | 2.0 | 5 | 2.5 | - | | 10 | 1.9 |
| 必要性を感じない | 重要でない | 4 | 1.6 | 4 | 2.0 | 2 | 2.4 | 10 | 1.9 |
| 理解不足 | 知識がない、知らなかった | 3 | 1.2 | 5 | 2.5 | 1 | 1.2 | 9 | 1.7 |
| 関心が薄い | | 3 | 1.2 | 3 | 1.5 | 2 | 2.4 | 8 | 1.5 |
| 昨年実施したから | | 4 | 1.6 | 3 | 1.5 | - | | 7 | 1.3 |
| 計画の見直し | | 6 | 2.4 | - | | - | | 6 | 1.1 |

教育課程が詰まっていて余裕のない学校の現状が示唆された。また、教材不足や何をしたらよいかわからないといった回答も複数あり、大会に向けて行われた教材の開発や普及が十分でなかったこともうかがえる結果であった。

### 2–4. 必要な支援（表 5）

オリ・パラ教育を継続するために必要な支援について尋ねたところ、最も多かった回答は、「教材の提供」（資料・動画など）で A 県 14.6%、B 県 11.2%、C 県 14.0%であった。次に「講師の派遣」が A 県 10.9%、B 県 13.0%、C 県 9.5%、「用具」（用具の貸し出し、支援）が A 県 4.7%、B 県 7.7%、C 県 8.4%であった。さらに、「予算」、「実践例の紹介・蓄積」、「情報の発信や更新」、「人材」、「時間の確保」、「指導計画の提供」、「教育課程への位置づけ」、「年間計画への位置づけ」などの回答があった。資料や動画などの教材を求める声が最も多く、先述した通り、教育活動の継続のためには、教材の開発や普及が課題であることが明らかとなった。また、「情報の発信や更新」も挙げられたことから、今後開かれる大会に関連する情報なども更新していく必要があると言える。また、外部講師の招聘や用具・施設の整備には予算が必要となるが、大会開催後の今後は、オリ・パラ教育としての予算の確保は見込めないことから、他の関連する分野との連携など何らかの措置や工夫が必要と考えられる。

## 3. オリ・パラ教育の影響

### 3–1. 大会開催以降の児童生徒の変化

東京 2020 大会の開催以降に、児童生徒に変化があったかどうか尋ねたところ、変化が「あった」と回答したのは A 県 38.4%、B 県 25.7%、C 県 31.3%、「なかった」は A 県 12.9%、B 県 13.5%、C 県 10.6%、「わからない」は A 県 48.7%、B 県 60.8%、C 県 58.1%であった（表 6）。地域によって違いはあるが 4 割弱が児童生徒の変化を感じていたが、「わからない」が約

表 5. オリ・パラ教育を継続するために必要な支援（上位抜粋）

| カテゴリー | 記述内容 | A県（n=466） | | B県（n=401） | | C県（n=179） | | 合計（n=1,046） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| 教材の提供 | 資料、動画（映像） | 68 | 14.6 | 45 | 11.2 | 25 | 14.0 | 138 | 13.2 |
| 講師の派遣 | 講師の紹介、指導者の確保、講演などの機会 | 51 | 10.9 | 52 | 13.0 | 17 | 9.5 | 120 | 11.5 |
| 用具 | 貸出、支援 | 22 | 4.7 | 31 | 7.7 | 15 | 8.4 | 68 | 6.5 |
| 予算 | | 17 | 3.6 | 24 | 6.0 | 8 | 4.5 | 49 | 4.7 |
| 実践例 | 紹介、蓄積 | 8 | 1.7 | 16 | 4.0 | 8 | 4.5 | 32 | 3.1 |
| 情報 | 情報の更新、発信 | 12 | 2.6 | 10 | 2.5 | 7 | 3.9 | 29 | 2.8 |
| 人材 | | 13 | 2.8 | 8 | 2.0 | 4 | 2.2 | 25 | 2.4 |
| 時間の確保 | | 3 | 0.6 | 15 | 3.7 | 3 | 1.7 | 21 | 2.0 |
| 周知・広報 | 必要性の普及、定期的なPR | 8 | 1.7 | 12 | 3.0 | 1 | 0.6 | 21 | 2.0 |
| 教育課程への位置づけ | | 9 | 1.9 | 6 | 1.5 | 4 | 2.2 | 19 | 1.8 |
| 指導計画の提供 | | 10 | 2.1 | 4 | 1.0 | 4 | 2.2 | 18 | 1.7 |
| 地域との連携 | | 0 | 0.0 | 15 | 3.7 | 1 | 0.6 | 16 | 1.5 |
| 年間計画への位置づけ | 年間計画の見直し | 9 | 1.9 | 3 | 0.7 | 2 | 1.1 | 14 | 1.3 |
| 関連団体との連携 | | 4 | 0.9 | 7 | 1.7 | 0 | 0 | 11 | 1.1 |
| 体験活動の充実 | | 7 | 1.5 | 0 | 0.0 | 3 | 1.7 | 10 | 1.0 |
| 連絡調整 | | 2 | 0.4 | 7 | 1.7 | 1 | 0.6 | 10 | 1.0 |
| 環境整備 | アスリートと関わる機会 | 1 | 0.2 | 9 | 2.2 | 0 | 0 | 10 | 1.0 |

5 割前後と最も多かった。教育の成果は多くの要因が関わって現れると考えられ、要因を明確に示すことは難しいことから、「わからない」という回答が多かったと考えられる。

児童生徒に変化が「あった」と回答した学校に対して、どのような変化があったかを尋ねた（表 7）。最も多かったのは、スポーツや競技・選手、パラスポーツ、大会そのものなどに関する「興味・関心が高まった」という回答で、変化があったと回答した学校のうち A 県 59.2%、B 県 60.2%、C 県 66.1%がこの回答であった。次に、おもにパラリンピックやパラスポーツに関する「知識・理解が深まった」が A 県 14.5%、B 県 20.4%、C 県 14.3%であった。そのほかには、挑戦、あきらめない心、意欲的な取り組みなどの「態度の変容」、「スポーツに参加することが多くなった」、「話題にすることが多くなった」などがあった。児童生徒の変化についてはすべての地域において、その大半が興味・関心の高まりであり、6 割前後が回答した。また、児童生徒の意欲を高めたり、スポーツ参加を促したりしたことも挙げられ、オリ・パラ教育による児童生徒の変容が大会後も継続していることが示された。

### 3–2. 大会開催以降の学校の取り組みの変化

大会開催以降に、学校の取り組みに変化があったかどうか尋ねたところ、「あった」と回答したのは A 県 19.1%、B 県 27.7%、C 県 29.6%であった（表 6）。地域によって差が大きく、2 割から多い県では 3 割の学校が、変化があったと回答した。この割合は、児童生徒の変化よりも低い割合であった。

学校の取り組みに変化があったと回答した学校に対して、どのような変化があったかを尋ねた（表 8）。最も多かったのは「体育授業の活用」で、A 県 29.2%、B 県 27.9%、C 県 34.0%がこの回答であった。続いて、「学校行事での活用」が A 県 27.0%、B 県 21.6%、C 県 22.6%で、パラスポーツや教職員を含めた「体験活動」を行うようになったのが A 県 11.2%、B 県 16.2%、C 県 24.5%であった。その他には道徳や人権、総合的な学習の時間等の「授業の中で活用」、「クラブ活動で活用」、パラスポーツに関する知識を身に付け、興味・関心が高まった、教職員の意識が変化した、地域や学校間の交流に役立ったなど、多様な回答があった。教育の対象である児童生徒への影響だけでなく、オリ・パラに向けて行った教育活動を授業や行事、学校全体の活動などに活用しており、大会による影響がその後も継続していることが明らかになった。

### 3–3. 大会開催以降の教員間や地域との関わりの変化

大会開催以降に、教員間や地域との関わりに変化があったかどうか尋ねたところ、「あった」と回答したのは A 県 18.2%、B 県 18.5%、C 県 22.3%であった。この割合は児童生徒よりも低く、学校の取り組みよりもさらに低い結果であった（表 6）。それでもすべての地域で、2 割前後の学校が変化があったと回答した。

表 6. オリ・パラ教育の影響

| | A県（n=466） | | | | | | B県（n=401） | | | | | | C県（n=179） | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 児童生徒の変化 | あった | | なかった | | わからない | | あった | | なかった | | わからない | | あった | | なかった | | わからない | |
| | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| | 179 | 38.4 | 60 | 12.9 | 227 | 48.7 | 103 | 25.7 | 54 | 13.5 | 244 | 60.8 | 56 | 31.3 | 19 | 10.6 | 104 | 58.1 |
| 学校の取り組みの変化 | あった | | なかった | | | | あった | | なかった | | | | あった | | なかった | | | |
| | 数 | % | 数 | % | | | 数 | % | 数 | % | | | 数 | % | 数 | % | | |
| | 89 | 19.1 | 377 | 80.9 | | | 111 | 27.7 | 290 | 72.3 | | | 53 | 29.6 | 126 | 70.4 | | |
| 教員同士や地域とのかかわりの変化 | あった | | なかった | | | | あった | | なかった | | | | あった | | なかった | | | |
| | 数 | % | 数 | % | | | 数 | % | 数 | % | | | 数 | % | 数 | % | | |
| | 85 | 18.2 | 381 | 81.8 | | | 74 | 18.5 | 327 | 81.5 | | | 40 | 22.3 | 139 | 77.7 | | |

表 7. 児童生徒の変化

| カテゴリー | サブカテゴリー | A県（n=179） | | B県（n=103） | | C県（n=56） | | 合計（n=338） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| 興味・関心が高まった | スポーツ・運動、競技・選手、パラスポーツ、オリ・パラなど | 106 | 59.2 | 62 | 60.2 | 37 | 66.1 | 205 | 60.7 |
| 知識・理解が深まった | パラ・パラスポーツ、多様性など | 26 | 14.5 | 21 | 20.4 | 8 | 14.3 | 55 | 16.3 |
| 態度が変容した | 挑戦・あきらめない心、意欲的、部活動など | 39 | 21.8 | 8 | 7.8 | 2 | 3.6 | 49 | 14.5 |
| 話題にすることが多くなった | | 9 | 5.0 | 5 | 4.9 | 5 | 8.9 | 19 | 5.6 |
| 意欲が高まった | | 8 | 4.5 | 2 | 1.9 | 4 | 7.1 | 14 | 4.1 |
| スポーツに参加するようになった | | 13 | 7.3 | 4 | 3.9 | - | | 17 | 5.0 |
| 夢や希望 | | 5 | 2.8 | 2 | 1.9 | - | | 7 | 2.1 |
| 視野が広がり、将来の夢につながった | | 4 | 2.2 | 2 | 1.9 | - | | 6 | 1.8 |
| スポーツ観戦が増えた | | 2 | 1.1 | 1 | 1.0 | - | | 3 | 0.9 |
| 身近に感じるようになった | | - | | 5 | 4.9 | - | | 5 | 1.5 |
| その他 | | 尊敬、ボランティア<br>おもてなし、外国文化 | | 共感<br>交流の楽しさ | | 感動がエネルギーに<br>文化の一つとして認識 | | | |

表 8. 学校の取り組みの変化（上位抜粋）

| カテゴリー | サブカテゴリー | A県（n=89） | | B県（n=111） | | C県（n=53） | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| 体育授業での活用 | | 26 | 29.2 | 31 | 27.9 | 18 | 34.0 | 75 | 29.6 |
| 学校行事での活用 | 運動会・体育祭、クラス活動、PTAなど | 24 | 27.0 | 24 | 21.6 | 12 | 22.6 | 60 | 23.7 |
| 体験活動（パラスポーツ、教職員） | | 10 | 11.2 | 18 | 16.2 | 13 | 24.5 | 41 | 16.2 |
| 授業の中で活用 | 道徳・人権、総合的な学習の時間 | 5 | 5.6 | 9 | 8.1 | - | | 14 | 5.5 |
| クラブ活動での活用 | | 3 | 3.4 | 4 | 3.6 | - | | 7 | 2.8 |
| パラスポーツに関する知識の広がり | | 1 | 1.1 | 5 | 4.5 | - | | 6 | 2.4 |
| 特別支援学級での活用 | | 2 | 2.2 | - | | 2 | 3.8 | 4 | 1.6 |
| パラスポーツへの興味・関心が高まった | | 1 | 1.1 | 3 | 2.7 | - | | 4 | 1.6 |
| 教職員の意識の変容（多様性・バリアフリー） | | - | | 3 | 2.7 | 1 | 1.9 | 4 | 1.6 |
| 新しいスポーツとしてパラスポーツに取り組んだ | | 2 | 2.2 | - | | 1 | 1.9 | 3 | 1.2 |
| 地域・学校間の交流の促進 | | - | | 3 | 2.7 | - | | 3 | 1.2 |
| 生徒会活動 | | - | | 3 | 2.7 | - | | 3 | 1.2 |
| 障害の有無にかかわらず取り組める | | 1 | 1.1 | 1 | 0.9 | 1 | 1.9 | 3 | 1.2 |
| スポーツへの興味 | | 2 | 2.2 | - | | - | | 2 | 0.8 |
| 掲示物 | | 2 | 2.2 | - | | - | | 2 | 0.8 |
| パラスポーツの用具の充実 | | - | | 2 | 1.8 | - | | 2 | 0.8 |

教員間や地域との関わりに変化があったと回答した学校に対して、どのような変化があったかを尋ねた（表 9）。最も多かったのは、「話題・コミュニケーションの促進」で、A 県 27.1%、B 県 18.9%、C 県 35.0%がこの回答であった。地域によって差があるが、A 県では 3 割弱、C 県では 3 割を越える学校が回答しており、オリ・パラが地域で共通の話題となり、コミュニケーションの促進に役立ったことが伺えた。次に地域との「交流が深まった」ことが挙げられ、A 県 17.6%、B 県 23.0%、C 県 12.5%であった。交流の相手は、地域や職員間、学校間、外国、高齢者などであった。また、オリ・パラやスポーツ、国際交流などへの「興味・関心が高まった」が A 県 12.9%、B 県 9.5%、C 県 22.5%で、児童生徒のみならず教員や地域でも興味・関

表 9．教員間や地域との関わりの変化

| カテゴリー | サブカテゴリー | A県（n=85） | | B県（n=74） | | C県（n=40） | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| 話題・コミュニケーションの促進 | | 23 | 27.1 | 14 | 18.9 | 14 | 35.0 | 51 | 25.6 |
| 交流が深まった | 地域、職員、外国、学校間、高齢者 | 15 | 17.6 | 17 | 23.0 | 5 | 12.5 | 37 | 18.6 |
| 興味・関心が高まった | オリ・パラ、パラスポーツ、国際交流、外国文化 | 11 | 12.9 | 7 | 9.5 | 9 | 22.5 | 27 | 13.6 |
| 意識の変容 | スポーツを楽しむ、ユニバーサルデザイン | 9 | 10.6 | 2 | 2.7 | - | - | 11 | 5.5 |
| 理解の深まり | オリ・パラ授業、障がい者 | 2 | 2.4 | 1 | 1.4 | 2 | 5.0 | 5 | 2.5 |
| 家庭・学校・地域の連携 | | 2 | 2.4 | 2 | 2.7 | 1 | 2.5 | 5 | 2.5 |
| 環境の整備 | | 2 | 2.4 | 2 | 2.7 | - | | 4 | 2.0 |
| 教員研修 | | 2 | 2.4 | 1 | 1.4 | - | | 3 | 1.5 |
| 大会参加（ボッチャ） | | - | | 1 | 1.4 | - | | 1 | 0.5 |

心が高まったことが明らかとなった。オリ・パラ教育活動には地域を活用した取り組みも多くあり、それらの活動を通して地域や教員間の関わりにも影響を与えていたことが明らかとなった。

## Ⅳ．まとめ

本調査では、全国展開事業に参加した 3 県を対象として、東京 2020 大会に向けたオリ・パラ教育の大会後の実態と、教育活動が残した影響について明らかにすることを目的とした。オリ・パラ教育活動の実態として、すべての地域で半数を超える学校がオリ・パラ教育活動を大会後も継続して行っており、大会後に新たに取り組む学校もあった。また、実際に行われている活動内容は、大会開催までに行った活動を継続・修正したものが多かったが、大会後に新たに取り入れた活動もあった。継続して行わない理由として、時間の確保が困難であることが多く挙げられ、教材の提供、講師の派遣、用具の提供などの支援が必要であることが明らかとなった。

オリ･パラ教育の影響として、児童生徒のスポーツやオリ･パラなどに対する興味関心が高められたこと、児童生徒のみならず、学校の取り組みについても影響を与えており、授業や学校行事で活用されていること、さらには、地域や教員間の共通の話題となりコミュニケーションが促進されたことなどが示された。

オリ・パラ教育は、学校教育におけるさまざまな場面で活用が可能である。東京 2020 大会の終了後も大会のレガシーとして学校教育に根付かせるためには、さまざまな課題があるが、本調査では、大会後の実態と教育活動の継続のための課題や必要な支援を明らかにした。結果を今後に生かすとともに、継続的な調査を行って、大会後の実態と教育活動の影響を明らかにしていく必要がある。

**＜参考文献＞**

文部科学省（2016）：オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて　最終報告.
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf
東京都教育委員会（2016）：東京都オリンピック・パラリンピック実施方針.
https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/files/olympic_paralympic_education_abstract/implementation_policy1.pdf

# 2023年度スポーツ庁オリパラ・ムーブメント・ネットワーク会議への参画について

体育系助教、CORE 事務局　　大林 太朗

東京 2020 後の大会レガシーの継承に向けて、スポーツ庁を事務局とする「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント・ネットワーク会議」が発足した。2021 年度までのスポーツ庁オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国中核拠点会議を母体とし、関係団体として東京都、日本オリンピック委員会（JOC）、日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会（JPC）、筑波大学、日本体育大学、早稲田大学、日本スポーツ振興センターが名を連ねている。本組織は関係団体相互の連携を促進するための会議体（以下に趣旨を引用）であり、2022 年度は下記の 2 回、会議が実施された。

趣旨（スポーツ庁配布資料より引用）：

東京 2020 大会に向けては、大会そのものへの興味関心の向上だけではなく、オリパラを題材として、スポーツの価値、国際・異文化、共生社会への理解を深めるとともに、規範意識を養うなど多面的な教育的価値を持つオリンピック・パラリンピック教育を全国各地で展開してきた。

東京 2020 大会後においても、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの推進を継続していくため、これまで蓄積されてきた多様な指導教材・指導事例の情報提供や活用、ICT を積極的に活用した活動、アスリートとの交流活動など、大会のレガシーを活かしつつ、より質の高い教育活動を進めていくことを目指し、関係団体が連携して、オリンピック･パラリンピック･ムーブメント・ネットワーク会議を定期的に開催することとする。

第一回

日時：2022 年 8 月 19 日（金）15:00 ～ 17:00

場所：文部科学省 16F 16F3 会議室

議題：

・本ネットワーク会議について

・令和 3 年度までのオリ・パラ関係の取組及び令和 4 年度の取組概要について

・今後の連携に関する方策等について（意見交換）

第二回

日時：2023 年 2 月 15 日（水）10:30 ～ 12:00

方法：オンライン（Zoom）

・令和 5 年度のスポーツ庁の新規事業について（スポーツ庁より）

・各団体の報告等（各団体より）

各会議において、本学（CORE 運営委員会）からは真田久特命教授、清水諭教授、宮崎明世准教授、大林太朗助教が参画し、スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」（2016-2021 年度）の各地域における継続調査（主に茨城県、長野県、山口県）の状況と新設センター構想（COPRE）などについて情報提供を行った。本会議は 2024 年度以降も継続される見込みである。

# 国内ユースフォーラム 2022 – TOKYO2020 のレガシーへの協力

附属高校教諭、CORE 運営委員　　中塚 義実

国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム（国際 YF）とは、世界中にあるクーベルタンスクールの高校生が 2 年に一度集まり、座学やスポーツ、アート活動を通してオリンピズムを学び、交流を深め合う行事である（過去の開催地については下図を参照）。




2022 年度は 11 月 2 日から 6 日にかけてドイツ・ミュンヘンで開催され、日本からは 5 名（国士舘高校、自由学園男子部、中京大附属中京高校、筑波大学附属高校、名古屋大学附属高校より参加）が参加し、18 か国からの参加者とともにオリンピズムの理解・促進を図った。この「国際 YF」については、特定非営利活動法人サロン 2002 のウェブサイトに詳しい報告書が掲載されているので参照されたい。
（https://www.salon2002.net/?p=1540）

これに関連して、CORE としては 2021 年度に引き続き、国内版としての日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム 2022（国内 YF）に主幹団体の一つとして参画した。以下に開催概要を示す。

日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム 2022

【目　的】

日本の高校生がオリンピック・パラリンピックについての基本的な知識を習得し、多彩な活動を通してオリンピズムやオリンピックムーブメントについての理解を深め、様々な学校の参加者と交流する。本フォーラムの活動を通して、次世代のスポーツ文化の担い手となる人材の育成に寄与する。

【主　催】　日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CJPC)
【共　催】　特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー (JOA)
【主　管】　筑波大学オリンピック教育プラットフォーム (CORE)
　　中京大学
　　特定非営利活動法人サロン 2002(NPO サロン )
【協　力】　東海学園大学スポーツ健康科学部
　　過去の国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム参加者

【開 催 日】　2022 年 12 月 26 日 ( 月 )、27 日 ( 火 ) 宿泊なし
【開催形式】　対面およびオンライン ( 初日 : オンライン、二日目 : 対面・オンライン併用 )
【開催場所】　関東地区：筑波大学附属高等学校・桐陰会館
　　中部地区：中京大学附属中京高等学校 5 号館 マルチパーパスルーム
【参 加 者】　関東：13 名、東海：6 名の計 19 名の高校生
【全体テーマ】　オリンピックと平和

12 月 26 日（月）オンライン
　9：00 ～ 10：00　オープニング（挨拶：田原淳子先生）／オリエンテーション（中塚）
　10：10 ～ 12：40　演習① 中京大学スポーツミュージアム活動（講師：來田享子先生）
　12：40 ～ 13：40　昼休憩
　13：40 ～ 14：30　講義① クーベルタンの思想と行動からオリンピズムを考えよう
　　（講師：和田浩一先生）
　14：40 ～ 15：30　講義② 嘉納治五郎とオリンピックムーブメント（講師：大林太朗先生）
　15：45 ～ 16：15　第 13 回国際 YF 参加報告（内藤智先生、国際 YF 参加者）

12 月 27 日（火）対面（オンライン併用）
　9：00 ～　9：10　諸連絡等
　9：10 ～ 10：00　講義③ オリンピックの平和運動（講師：舛本直文先生）
　10：10 ～ 12：30　演習② OVEP を用いた特別講義、グループディスカッション
　　（講師：宮崎明世先生、Karen Pullupaxi 先生）
　12：30 ～ 13：30　昼休憩
　13：30 ～ 14：20　グループディスカッション発表
　14：40 ～ 16：10　運動プログラム（講師：関東；中塚、中部；木村華織先生）
　16：25 ～ 17：00　クロージング（挨拶：嶋﨑雅規先生）
　17：00　解散
　※課題レポートを 12 月 28 日（水）中に提出する

オンラインとなった初日は、基本的に各参加者は自宅から、一方で中京大附属の生徒は学校から参加した。前年度同様、中京大学のミュージアム見学とグループ活動がオンラインでなされ、午後からはクーベルタン、嘉納治五郎についての講義が展開された。最後に第 13 回国際 YF 参加報告として、引率教員を務めてくださった内藤智教諭によるプレゼンテーションが行われた。

2 日目は対面開催、各会場をオンラインでつなぐハイブリッド方式で行われた。舛本先生によるスポーツと平和に関する講義、続く OVEP の演習は CORE 運営委員の宮崎准教授による「オリンピックのレガシー」についての内容であった。エクアドルから筑波大学大学院（スポーツ・オリンピック学学位プログラム：TIAS2.0）に留学しているカレンさんも英語でコメントを述べた。内容がスポーツと持続可能性を主題として、各大会の競技施設が大会後にどのように使われているのかを調査し、各グループで大会後の施設利用についてのアイデアを発表するものであった。







その後、参加者は着替えて運動プログラム「モルック」を行った。東京地区と東海地区でそれぞれ紅白 2 チームに分かれ、2 会場の経過を共有しながら紅白戦形式で楽しんだ。少人数による国内 YF であったが、国際 YF とはつながらない年もこのように続けていくことが大事だと考える。2023 年末も、対面とオンラインを併用して 2 日間もしくは 3 日間、できれば宿泊を含めて開催したいと計画している。TOKYO2020 のレガシーとして続け、育てていきたい。

## 実践報告

# 東京オリンピック・パラリンピックの前と後

附属小学校　　齋藤 直人

**1. 題材名**

全校朝会「オリンピック・パラリンピックの会場のビフォー・アフター」

～東京オリンピック・パラリンピック 2020 のレガシー～

**2. 内容**

(1) 題材について

今回は 1 つの授業ではなくて、全校児童が参加する全校朝会でのオリンピック・パラリンピック教育の実践を紹介する。

今回の実践は、東京オリンピック・パラリンピック 2020 を控えていた【2019 年 12 月 3 日】の朝会と、東京オリンピック・パラリンピック 2020 が開催された後に行った【2022 年 6 月】の 2 部構成となっている。

どちらの朝会でも、東京 23 区の中にある東京オリンピック・パラリンピックの各競技会場を筆者が自転車を使って、取材・撮影したものを全校児童に紹介した。

朝会の具体的なねらいは以下の 2 つである。

①オリンピック・パラリンピックを控えた会場の様子を知ることでオリンピック・パラリンピックの本大会への興味をもつきっかけを作る

②オリンピック・パラリンピックの様子を思い出しながら約半年を過ぎると会場はどのように活用されたり、使われたりしているのかを知ることでオリンピック・パラリンピックが終わった後の東京の姿を考えるきっかけを作る

東京オリンピック・パラリンピックが物理的に身近なものであっても、その身近なものを意識的に捉えることで、オリンピック・パラリンピックをスポーツの祭典という捉え方だけでなく、社会にどのような影響を与えるのかについても考えることがより重要だと考えた。

(2) 実践の実際

①オリンピック・パラリンピックを間近に控えた会場の様子を知る








オリンピック・パラリンピックの開会まで、約 8 か月と迫っているにもかかわらず、ほとんどの会場が工事中ということに驚いた。大会のホームページに掲載してあった完成予想図を先に見せ、その後に子どもたちに現状を写真で伝えたので、完成とは程遠い姿に驚いていた。

特に BMX やスケートボードの会場は、空地のような状態で、本当に間に合うのかと思ってしまうほどであった。

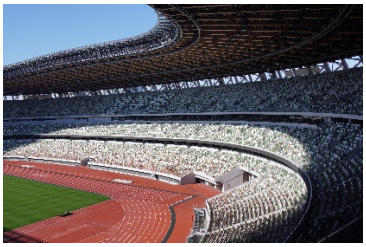
②オリンピック・パラリンピックが終わった後の会場の様子を知る









コロナ 2019 の影響で 1 年遅れとなったオリンピック・パラリンピック。あの感動と興奮を生み出した会場はどうなっているのか。国立競技場は内部も見学できるようになり国内屈指の屋外競技場として活用されている。日本武道館もさまざまなイベントで活用されている。

一方で、メンテナンス工事をしていたり、体操競技で使われていた有明体操競技場は解体工事をしていたりした。また、ボルダリングなどが行われた青海アーバンスポーツパーク、BMX や日本人が金メダルも獲得したスケートボードが行われた有明アーバンスポーツパークなどは、当時の面影はなく、駐車場や更地になっていた。この事実を知った子どもたちは、かなりの衝撃を受けていた。

**3. 今後の予定**

これからも継続して、オリンピックのレガシーとは何かについて子どもたちと考えたい。

# オリンピック・パラリンピック教育の実践報告

附属中学校　　秋山 和輝

## 1. 背景

昨年度に開催された東京オリンピック競技大会、東京パラリンピック競技大会を終えて、本校でも継続的なオリンピック・パラリンピック教育（以下オリパラ教育）の推進を図った。今年度の本校のオリパラ教育を授業実践、総合学習、特別活動の3つに整理して活動を報告する。

## 2. 目的

本校のオリパラ教育の活動報告を目的とした。そのための各取り組みを以下のように設定した。

(1) 保健体育科の授業における実践事例

(2) 総合学習の取り組み

(3) 特別活動での取り組み

## 3. 実践報告

(1) 保健体育科の授業における実践事例

本校では計画的、継続的にオリパラ教育を実践してきた。今年度は柔道の授業における嘉納治五郎先生の精神について学習する機会を設定した。以下、柔道授業の実践例の紹介である。

①本校3代目校長嘉納治五郎先生の精神について

1964年の東京オリンピック以前に幻のオリンピックが計画された。それはご存じの通り1940年の幻になってしまった東京オリンピックである。その誘致に関わり、国際オリンピック委員会委員であった嘉納治五郎先生について講道館柔道の創始者という視点で歴史的背景から柔道の精神に至るまで紹介した。

嘉納治五郎先生が残した有名な言葉である「精力善用」、「自他共栄」だけに留まらず、生徒には「柔道、剣道の共通点は何か」について発問し、共通点である「道」を究めるということはどのようなことなのかを伝え、稽古という言葉の成り立ちなど柔道で重んじている精神を紹介した。また柔道の精神をもとに仲間との攻防を楽しんだ（写真2）。

**道を究める**

勝ち負けではなく、人生を通してきわめていくもの。例えば、卑怯なことはしない、正々堂々と戦う、勝っても負けても相手に感謝する。あくまでも相手は自分であり、そのために相手が存在してくれていて、最終ゴールは自分に克つことである。そのような考えのもと、公平性、透明性、正義を貫く、決して逃げない、常に戦う。これらのことは人生や生活も同様であると考える。

写真1．活用資料



写真2．柔道授業の様子

②ボッチャの実践報告（第２学年）

２年生の体育理論でパラリンピック種目のボッチャを体験する活動を行った。だれでもだれとでも楽しめる種目であり、仲間との交流の視点から好意的な感想を述べる生徒が多数見受けられた。

性差、技能差、経験を問わず楽しめることに競技としての特性があると同時に勝利するための作戦や戦術を仲間と考えながら行えることも魅力の一つである。



写真３．ボッチャの実践の様子

⑵ 総合学習の取り組み

本校ではスポーツの多様性な関わりをテーマに総合学習で探求活動を進めた。スポーツというテーマでは生徒に馴染みがあるものの他者理解やダイバーシティの視点につなげながらスポーツを通した様々な活動を学習する場である総合学習の取り組みを紹介する。

①ブラインドウォーク

アイマスクをした状態で校内を歩いてみる体験活動を行った。歩き慣れている校内であってもアイマスクを装着した状態で歩くことは容易ではなく、リード（介助）してくれる友達を頼りにゆっくりと歩いている様子が写真から伝わる。目が不自由な人がどのようなことを経験しているのかを理解するための貴重な体験の場となった。



写真４．ブラインドウォークの様子

②点字の読解

附属視覚特別支援学校の内田智也先生を招聘した際に連立方程式を点字で一文字ずつ読み解く活動を行った。普段は数学が得意な生徒でも点字を読み解くことは一苦労であり、試行錯誤しながら仲間と協力して取り組めた。

一文字ずつの数字の点字を読み解くことは難しく、グループで役割分担して取り組むことができた。普段学んでいる数学と異なる視点、方法があることを生徒たちは学ぶ機会となった。



写真５．点字読解の様子

③点字キットを用いた点字の作成体験

生徒一人に１セット用意し、自分の名前や自己紹介を点字で作成させた。点字を打つことだけでも一苦労であるのに友達が作成した点字を読み解くことはさらに大変であった。最終的には目視で点を読み解くといった活動であったが点字を作成する、点字を読み解くという貴重な経験をすることができた。

④オリパラ教育関連図書の充実

2年生の総合学習では2コースがオリパラ教育に関わる内容を一部取り扱った。生徒はスポーツやオリンピック、パラリンピックに関連する興味関心を主体的に調べるため関連図書の充実を図った。総合学習だけではなく、休み時間や放課後などの時間を活用して図書室から自由に関連図書を借りることができた。

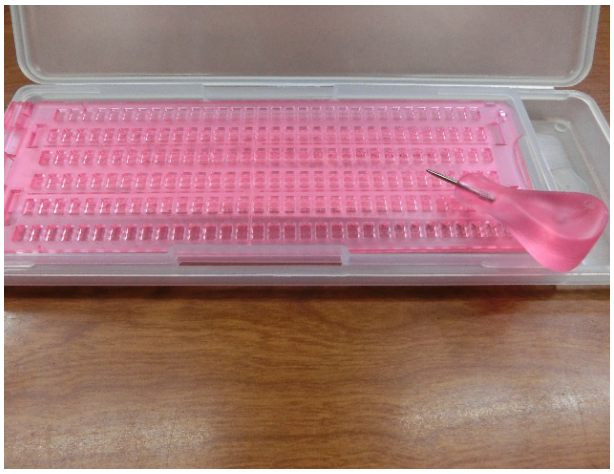


写真6．使用した点字キット




写真7．関連図書の一部

⑤国立競技場のスタジアムツアー

東京大会で使用された国立競技場に実際に入り、アスリートと同じ目線で体験できる機会となった。競技場の中のトラック&フィールドや展望デッキの見学だけではなく、普段は見ることのできないロッカールームやサインウォールなどツアーでないと見れない場所を見学できて、生徒たちの喜んでいる様子が印象的であった。



写真8．トラック&フィールド内の様子



写真9．展望デッキの記念撮影

(3) 特別活動での取り組み

2月に中学1、2年生を対象にブラインドサッカー日本代表の鳥居健人選手を招聘し、ご講演いただいた。対面での講演会は約3年ぶりであり、ブラインドサッカーやインクルーシブな視点を知れる大変貴重な経験となった。講演内容は鳥居選手がブラインドサッカーに出会う前の話までさかのぼり、ブラインドサッカーを通して経験された内容や視覚障がいを持っている方がどのような生活を送っているのかまで多岐にわたる内容であった。質疑応答の時間で生徒からのたくさんの質問の中には「夢は見るのですか。」（中学1年生）という純粋な内容から「（私たちは生活の中で無意識のうちに相槌を打っていますが）目が見えない方と会話する場合はどのようなことに気を付ければよいか。」（中学2年生）といった知っておくべき内容まで様々な質問がでた。鳥居選手はどの質問にも丁寧に答えてくださり、大変貴重な機会となった。講演終了後も質問やサインを求める生

徒が多数見受けられたことからも生徒にとって充実した活動であったことが窺える。

以下の内容は講演会を聞いた生徒の実際の感想である。

*・「何事も知ること、やる前から決めつけない」という言葉がとても印象に残りました。また、「助けてもらうだけではない。助けることもできる。」という言葉も心に残っています。この言葉で、すごく前向きに考えることができるようになりました。諦めず、可能性を求めて頑張っていきたいと思います。*

*・「初めてのことに恐れたり、距離をとったりせずにチャレンジする」という精神がとても印象に残りました。もし自分が鳥居さんの立場だったら「僕にはできない」と離れていってしまうと思うので、これから自分には難しいことも諦めずにチャレンジしていきたいです。*



写真 10. 鳥居健人選手



写真 11. 講演会後に生徒に取り囲まれる鳥居選手

**4. 成果と課題**

生徒を取り巻く社会環境は大きく変化しつつあり、ダイバーシティ＆インクルージョンという言葉は生徒にとっても聴きなれている言葉である。そのような視点で考えると探究的に活動を進められる総合学習で様々な視点からオリパラ教育の充実が図られた。一方で保健体育科以外の教科との連携や学校全体のカリキュラムにどのように位置づけるのか、またどのように関連付けるのかということが十分に検討されていないことは課題として挙げられる。オリンピックやパラリンピックを一過性のイベントにしないために東京大会が終わった今だからこそ我々は今後のオリパラ教育が充実するためにできることを検討しなければいけない。

**5. 今後の予定**

例年オリンピアンやパラリンピアンの講演会を催しているが、単発のイベントになってしまっていることを危惧している。継続的にオリパラ教育の推進を図るのであれば年次の計画やカリキュラムまで十分に検討する必要がある。また講演だけではなくて、体験会や生徒との座談会など能動的に学習を深められる機会を設定していきたいと考える。

# 附属高校の取り組み

附属高等学校　　鮫島 康太

**1. 体育理論などの授業**

保健・体育理論の授業では、オリンピック・パラリンピックを題材にした授業や、それに付随する様々な問題を取り上げて授業が行われ、生徒の問題意識を育む貴重な場となっている。今年度は 2020 東京オリンピック・パラリンピックに関して様々な問題が報道されていることを受け、経済や政治との関りについて生徒の関心も高かったように感じる。これらの問題は保健体育科だけではなく他教科でも取り上げられ、生徒は様々な観点からオリンピック･パラリンピックをとらえる良い機会となった。

**2. 筑波スタディとしての取り組み（総合的な探究の時間）**

「筑波スタディ」では、一年次では研究調査に関する手法（データ収集、統計など）を学習し予備研究を行う。二年次で課題研究を行い、最終的には論文を作成するというものである。二年次の大まかな流れは、4 月にオリエンテーション、5 月に研究グループ形成とテーマの焦点化を行い本格的な研究活動に入っていく。オリンピック・パラリンピックに関連することが研究題材として複数挙がってきている。

**3. 学校行事として（スポーツ大会）**

スポーツを通して他者とのかかわりから多くのことを感じ学ぶ姿勢を養うことがオリンピズムであると考えれば、本校で行っている「スポーツ大会」もオリンピック教育の代表的な事例の一つである。

コロナ禍では様々な開催形態を模索した結果、学年ごとの実施となった。しかし、今年度は、念願の全校生徒同日の「一斉開催」となった。種目は「バレーボール」「フットサル」「ドッジボール」で 1 日半をかけて行われた。2 日の午後にはイベントと称してクラス対抗種目で競った。一学年が「綱引き」、二学年が「大縄」、三学年は「クラス全員リレー」であった。これらに加えて 1 組～ 6 組をそれぞれのチームとして、その中から選手を集め「代表リレー」を行った。

他学年の生徒を応援したり、他人から応援される喜びや楽しみを感じる表情、互いにアドバイスし合う姿や健闘をたたえ合う姿はオリンピズムを体現していると言える。



【写真①】スポーツ大会開会式での準備体操の様子

**4. 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの参加、および日本ピエー ル・ド・クーベルタンユースフォーラムへの参加**

2 年に一度開かれる「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF)」は世界中から集まった高校生同士がスポーツやアート活動、座学や討議などを通してオリンピズムを学ぶ。延期となった 2021 年キプロス大会は開催地を 2022 年にドイツ・ミュンヘンに替え実施された。本校からも一名の生徒が派遣された。また、国際 YF への参加者選考を兼ねる「日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム」にも複数の生徒が参加した。

**5. その他**

保健体育科を中心とする日々の授業や学校行事、部活動等、学校における教育活動全般にわたって「オリンピズム」を学ぶ姿勢は、嘉納治五郎校長の頃から本校が取り組み、いまも受け継がれている。他校との伝統ある部活動定期戦なども実施されている。

2022 年度末、コロナ禍の様々な制限が緩和される状況を迎えている。他人とつながり合うなかで、相手を尊重したり、その気持ちを伝えたりすることはオリンピズムの最も核となる部分である。コロナ禍で得たものや感じたことは多く、他人とつながり合うことの尊さは誰もが再確認したのではないだろうか。コロナ禍で得られなかったものもあるが、今後社会を担う青少年たちが「つながることの重要性」を感じたと信じて、それをさらに良い方向に導いていけるよう、研鑽を積んでいく所存である。

# オリンピック・パラリンピック教育－附属駒場の取組について－

附属駒場中・高等学校　　山合 洋人

## 1. オリンピック形式による体育祭の復活

本校の三大行事の一つである体育祭は「オリンピック形式」で 2 日間行われる。オリンピック形式は半世紀以上前から続く駒場の伝統的なスタイルであり、午前の部に球技種目、午後の部には個人種目を配置し、複数種目を同時進行させる全員参加型の体育祭である。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の影響により、一昨年は中止、昨年は縮小開催を余儀なくされたが、今年度はこれまで明らかにされてきた感染症予防に関するエビデンスや学校生活の中で実践してきた感染症対策を駆使して開催した。体育祭の通常開催に向けて講じた具体的な感染症対策は以下の通りである。

① 当日の出席点呼時や選手招集時における手洗い、手指消毒、検温の徹底。

② 昼食時のルール徹底。主に黙食、昼食時間の遵守。

③ 競技者のマスク着用は任意とし、観戦者にはマスク着用協力を呼びかけ。

④ 校舎（各教室）の開放。

⑤ 屋内種目の観戦は着席のみに限定。

⑥ 既存競技種目の再選定、ルール改変について検討。

様々な課題がありながらも、ほぼコロナ前の形態で開催できたことは大きな成果である。今後も社会情勢を注視しつつ、新しい体育祭の形態を検討し続けていかなければならない。

表 1. 体育祭 1 日目のタイムテーブル
（実施種目：サッカー、ハンドボール、バスケ、バレー、卓球、バドミントン、ドッジボール、剣道、陸上競技、パワーウォール、大縄、綱引き）

| | 1日目 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | グラウンド | | | | 体育館 | | テニスコート | | 各教室 |
| | 南側 | | | 北側 | | | | | |
| | ミニ | ミニ+ハンド | ハンド | | バスケ | バスケ | バレー | バレー | |
| 団体 | 道路側 | 中央 | 武道館側 | サッカー | 武道館側 | 校舎側 | グラウンド側 | マンション側 | |
| 08:30-08:55 | 開会式 | | | | | | | | |
| 09:00-09:05 | 準備体操 | | | | | | | | |
| 09:10-09:40 | 大縄 | | | | | | | | |
| 09:51-10:23 | 中1a<br>A-B | 中2a<br>A-B | 中3<br>A,B | 中3<br>A,B | 中1<br>A-B | 中2<br>A-B | 中1<br>A-B | 中2<br>A-B | |
| 10:29-11:01 | 中1b<br>B-C | 高2<br>1,3 | 高3<br>1,2 | 高1<br>1,2 | 中3<br>A-B | 高1<br>1,3 | 中3<br>A-B | 高1<br>1,2 | |
| 11:07-11:39 | 中2b<br>B-C | 中3<br>B,C | 高1<br>1,4 | 高2<br>1,4 | 高2<br>1,2 | 高3<br>1,4 | 高2<br>1,3 | 高3<br>1,4 | |
| 11:45-12:17 | 中1a<br>A-C | 中2a<br>A-C | 高1<br>2,3 | 中3<br>B,C | 中1<br>B-C | 中2<br>B-C | 中1<br>B-C | 中2<br>B-C | 高２高<br>昼食 |
| 12:23-12:55 | 中1b<br>A-C | 高3<br>3,4 | 高2<br>2,4 | 高3<br>1,3 | 高2<br>3,4 | 高3<br>2,3 | 高2<br>2,4 | 高3<br>2,3 | 中３高<br>昼食 |
| 13:01-13:33 | サッカー 高1 3,4 | | | 高2<br>2,3 | 中3<br>B-C | 高1<br>2,4 | 中3<br>B-C | 高1<br>3,4 | 中１中<br>昼食 |
| 13:33-13:53 | 昼休憩 | | | | | | | | |
| 個人 | グラウンド | | ピロティ | | 卓球場 | 体育館 | | テニス | |
| 13:53-14:58 | 1500mリレー | | 高校<br>パワーウォール | | 高校<br>卓球 | 中学<br>バド | 中学剣道 | 中学<br>ドッジ | |
| 14:58-15:38 | クラ中 | | | | | | | | |
| 15:38-15:58 | 色R | | | | | | | | |
| 15:58-16:43 | 綱引き | | | | | | | | |

表 2．体育祭 2 日目のタイムテーブル
（実施種目：サッカー、ハンドボール、バスケ、バレー、卓球、バドミントン、ドッジボール、剣道、陸上競技、パワーウォール、棒引き）

| | 2日目 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | グラウンド | | | | 体育館 | | テニスコート | | 各教室 |
| | 南側 | | | 北側 | | | | | |
| | ミニ | ミニ+ハンド | ハンド | | バスケ | バスケ | バレー | バレー | |
| 団体 | 道路側 | 中央 | 武道館側 | サッカー | 武道館側 | 校舎側 | グラウンド側 | マンション側 | |
| 08:30-08:40 | 中間式 | | | | | | | | |
| 08:40-09:10 | 応援合戦 | | | | | | | | |
| 09:15-09:20 | 準備体操 | | | | | | | | |
| 09:35-10:07 | 中2b<br>A-C | 中3<br>A,C | 高2<br>三決 | 高3<br>2,4 | 中1<br>A,C | 中2<br>A,C | 中1<br>A,C | 中2<br>A,C | |
| 10:13-10:45 | 中1a<br>B-C | 高３<br>三決 | 高２<br>決勝 | 中3<br>A,C | 中3<br>A,C | | 中3<br>A,C | | |
| 10:51-11:23 | 中2a<br>B-C | 高1<br>三決 | 高3<br>決勝 | 高1<br>三決 | | | | | |
| 11:29-12:01 | 中1b<br>A-B | 中2b<br>A-B | 高1<br>決勝 | 高１<br>決勝 | 高1<br>三決 | 高1<br>決勝 | 高1<br>決勝 | 高1<br>三決 | 高２高<br>昼食 |
| 12:07-12:39 | サッカー　高２　三決 | | | 高３<br>三決 | 高2<br>三決 | 高3<br>三決 | 高2<br>三決 | 高3<br>三決 | 中３高<br>昼食 |
| 12:45-13:17 | サッカー　高２　決勝 | | | 高３<br>決勝 | 高2<br>決勝 | 高3<br>決勝 | 高2<br>決勝 | 高3<br>決勝 | 中１中<br>昼食 |
| 13:17-13:37 | 昼休憩 | | | | | | | | |
| 個人 | グラウンド | | ピロティ | | 卓球場 | 体育館 | | テニス | |
| 13:37-14:27 | スウェーデン<br>リレー | | 中学<br>パワーウォール | | 中学<br>卓球 | 高校<br>バド | 高校剣道 | 高校<br>ドッジ | |
| 14:27-15:02 | 色駅伝 | | | | | | | | |
| 15:02-15:57 | 棒引き | | | | | | | | |
| 16:02-16:30 | 閉会式 | | | | | | | | |



図 1．開閉会式時は原則マスク着用



図 2．応援合戦のマスク着用は任意



図 3．屋内種目の観戦は着席のみに限定



図 4．競技者のマスク着用は任意、観戦者にはマスク着用協力を呼びかけ

**2．テーマ学習における取組**

本校では、各学年週 2 時間の「総合的な学習の時間」を設定し、中学 3 年生時に個別課題テーマ学習を実施している。本学習は少人数の選択授業で個別のテーマに基づき、通常の授業では扱いにくい、より深化した学習内容を取り上げるという性質を有している。保健体育科から今年度開講された講座では、ボッチャやモルック等を取り扱った。いずれも生徒にとっては馴染みのないスポーツで、好奇心旺盛に取り組む姿が印象的であった。本学習以外の時間（例えば休み時間等）にも「モルックを貸してください」と問い合わせに来る生徒が数名おり、親しまれている様子が観察できた。



図 5．ボッチャに取り組む生徒



図 6．モルックに取り組む生徒

**3．高 2 体育理論における取組**

高校 2 年生の体育理論「オリンピック・パラリンピックと国際社会」や「スポーツの経済効果とスポーツ産業」単元と関連付け、『東京 2020 オリンピック SIDE:B』を視聴した。DVD では、東京 2020 オリンピック・パラリンピックを支えた人々の情熱や苦悩をありのままに表現しており、競技を「する」側面とは異なる側面について理解を深めさせることができた。



図 7．高 2 体育理論様子①

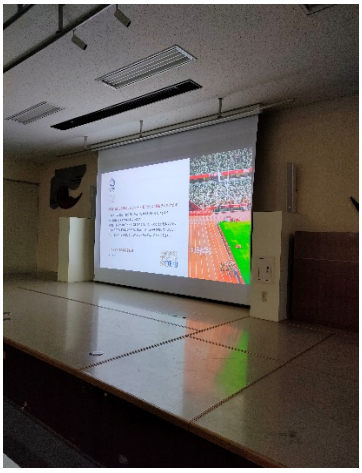


図 8．高 2 体育理論様子②




図 9．視聴した DVD 表紙（公式 HP より）

# 新しいスポーツを創造しよう！

附属坂戸高等学校　　野村 拓也、中村 咲野

坂戸高校では、2 年次選択科目「スポーツを科学する」、「援助コミュニケーション」を履修している生徒 23 名がアダプテッドスポーツを考案し、大塚特別支援学校および桐が丘特別支援学校の生徒と一緒に、その考案したスポーツを楽しむ交流活動を行った。坂戸高校の生徒は秋の交流会に向けて、7 月から新しいスポーツの考案に取り組んだ。創作過程では、ルールだけでなく、いかに楽しい場を創るか、という視点でも工夫を重ねた。試行錯誤の末、作り出されたのが「ターゲットポイント」、円形状のボーリングである。ピンはバケツやペットボトル、お菓子の箱などを利用した。見やすさと雰囲気づくりのために、色紙を貼りカラフルにしたり、肢体不自由な生徒でもピンを倒せるよう、ボールを雨どいに伝わせたりするなど、できる限り工夫を凝らした。





附属大塚特別支援学校での交流では、初め緊張した面持ちだった坂戸高校の生徒も、大塚特別支援学校の生徒の元気のよさ、壁を作らない姿勢に引っ張られ、気がついたら自然とハイタッチを交わしたり肩を組んだりしていた。振り返りでは「大塚生が自分たちを巻き込んでくれて、すごく安心した」と話す者もいた。

一方、附属桐が丘特別支援学校での交流では、互いに緊張した様子から活動が始まった。自ら距離を縮めようとする生徒、最後まで積極的に関わりにいけない生徒など様々であった。勇気をもって触れ合い壁を超える楽しさを体感した者、関わりき

れずにモヤモヤとした気持ちを残した者、それぞれの経験は生徒の成長につながったはずである。

坂戸高校の活動は WOWOW が進める、WHO I AM PROJECT の協力を得ながら進めた。「WHO I AM PROJECT では、2016 年のスタート以来、ドキュメンタリーの放送・配信だけでなく、「放送はゴールではなくスタート」を合言葉に、プロデューサーによる講義、映像の教材化、書籍化・コミック化、ユニバーサルスポーツイベントの立ち上げ、企業とのコラボレーション、WHO I AM HOUSE の一般オープンなど、映像を基軸としたさまざまな展開を実施してきた。」（WOWWOW WEB MAGAZINE HP より）。今回の坂戸高校の活動には、番組プロデューサーの太田様、畑様に来校いただき生徒に対して様々な指導をいただいた。また、元車いすバスケットボール日本代表キャプテンである豊島様も来校され、生徒の活動に助言をいただいた。

このように、多くの方の協力を得ながら、2022 年の活動を終了することができました。紙面をお借りして、お世話になった全ての皆さんにお礼を申し上げます。



# 本校卒業のパラアスリートとの交流（ゴールボール体験）

附属視覚特別支援学校　　山本 夏幹

2022 年 9 月 15 日、現役ゴールボール選手の卒業生である川嶋悠太選手（チーム附属）、天摩由貴選手（みなでしこ）、信澤用秀選手（チーム附属）の 3 名を招き、パラリンピック教育を実施した。この 3 名はパラリンピックでの代表キャプテンや国際大会で活躍しているパラアスリートで、高等部 2 年生を対象とした体育の特別授業において、実技指導を担当してもらった。今年度のパラリンピック教育では①パラリンピック等の国際大会で活躍しているパラアスリートとの交流を通じて、スポーツへの興味関心を高める②アスリートが有している「コツ」について指導してもらい、スポーツ動作獲得の気づきを得る機会とする③スポーツ活動を通じて自己実現をしているアスリートの姿から、夢や目標に向かって進んでいく活力を得る、の三つを目的としており、今回は初めて実技指導も交えた形で実施した。

特別授業は二部構成とし、前半部分は２グループに分けて、パラアスリートからボールの投げ方のコツや守備の基本姿勢と応用について直接指導をしてもらい、後半部分はパラアスリートも交えた形で試合を行った。前半部分で教えてもらった技術にチャレンジしてみたり、仲間とゴールを奪う喜びを分かち合うなどゴールボールの本質を楽しむことができた。また、生徒チーム対パラアスリートチームという形式で試合を行い「ホンモノ」に触れることで、パラアスリートたちが積み上げてきた技術の凄さを体感することができた。

生徒たちからは「2 時間の授業から、ゴールボールに、仲間と協力してお互いにカバーし合うチームスポーツの良さと、自分で目標を決めて攻撃や守備の技術を高めていける個人スポーツの良さの、どちらの良さもあると感じました。そして、ゴールボールがもっと好きになりました。」「今回の授業でだいぶゴールボールというものを再認識できたと思うし、何より全体を通して仲間たちとやったということもあるだろうが、とても楽しく、時間があっという間に過ぎる感覚がしたので、それだけ自分が満足しているのだなと実感できた 1 日だった。」といった感想が多く寄せられ、もともとスポーツやゴールボールを好む生徒だけでなく、パラアスリートとの交流を通じて、スポーツから得られる達成感や仲間と喜びを分かち合う心地よさを参加したすべての生徒に味わってもらうことができた。



# 令和4年度附属聴覚特別支援学校におけるオリンピック･パラリンピック教育の取組

附属聴覚特別支援学校　　荒川 郁朗

## 1. はじめに

本校でのオリンピック・パラリンピック教育は幼稚部から専攻科の各部各科において幼児児童生徒の実態に即して行われている。小学部→中学部→高等部普通科→高等部専攻科というローテーションで行っている「車いすバスケットボール」は今年度5年目を迎え、対象は小学部高学年児童であった。また「ラート運動」は今年度7年目を迎え、対象は継続的に中学部生徒としており、全学年で取り組むことができた。

## 2. 車いすバスケットボール

12月16日（金）、小学部高学年児童28名を対象に、車いすバスケットボール体験会を行った。

これまで4年間継続して講師としてお願いしてきた、東京都車いすバスケットボールチーム「NO EXCUSE」所属・橘貴啓選手に今年度も講師の了解を得ていたが、橘選手の公式戦とこの日が重なってしまったため、講師の招聘を断念して、本校体育科教員の主導で体験会を行うこととした。

使用する競技用車いすは、例年、千葉県スポーツ･レクリエーション協会から一週間程度借用している。借用している期間中は、体験会の対象学部以外の児童生徒も、体育等の授業の中で短時間ではあるが、車いすの体験をしてきている。しかし今年度は、東京パラリンピック後ということもあり、車いすの借用希望が増えていて、日程調整が難しかった。実際に借用した期間は2日間であり、実質当日の1日のみの使用が可能ということになっていた。そのような中で橘選手の来校が困難ということもあり、日程の変更をすることができず、体育科教員で体験会を行うことになった。

体験に参加した児童たちは、事前の授業で学校所有の一般用車いすへの乗車を体験してから、当日を迎えた。まず実物を見て、一般用と競技用の車いすの違いを確認した。ほとんどの児童が競技用車いすを見るのが初めてであったため、実物を見ると次のような違いに気付くことができた。

・「競技用は前から見るとタイヤがハの字になっている。」
・「競技用は、後ろに小さなタイヤが付いている。」
・「競技用は、背もたれが低くなっていて、後ろから押すためのハンドルがない。」など

次に乗車する際の注意点を確認して、実際に乗車した。競技用車いすは10台準備していたため、1台につき2～3名のグループを組んで交代で乗車し、前進・後退・回転の練習を行った。

一通り競技用車いすの操作を体験してから、ボールを使った練習に取り組んだ。バスケットボールゴールの高さは児童用の260cmに設定したが、バスケットボール5号球を座った状態で上半身のみでシュートするにはかなりの力を要することから、今回はバレーボール5号球を使用して行った。

ランニングシュートは、ゴールに向かって車いすを走行させている児童に、ゴールの手前でボールをパスして、そのままシュートにつなげる練習を行った。地に足がついていない感覚がなかなかつかめず、苦労しながらも真剣に取り組むことができた。

練習を行った後は、学年ごとに試合を行った。試合では、パスが思うようにつながらない、車いすの操作で手間取って、行きたいところに進めない等、思うように進まないもどかしさもありながら、日頃、体験できない動きに、児童たちは夢中になって取り組んだ。

体験後、以下のような感想が挙げられた。車いすバスケットボールへの興味・関心が高まったことが伺える。以下に一部を紹介する。

・「車いすのタイヤを両方一緒に回さないとまっすぐ進まないことがわかった。」
・「車いすバスケットボールの選手のプレーを生で見てみたい。選手に教えてもらいたい。」
・「普通の車いすと違って、タイヤがななめになっていることで、回りやすく、スムーズに操作できることに気が付いた。」
・「もっと長い時間、練習をして、また試合をやってみたい。」



前進・後退・回転の練習の様子



学年に分かれて試合をする様子

**3. ラート運動**

1 月 20 日（金）、中学部生徒 43 名を対象に、ラート運動体験会を行った。

本校でのこの体験会は、令和 2 年度の新型コロナウイルス感染症の拡大による中止を挟んで、7 年目を迎えた。講師には筑波技術大学の天野和彦准教授をお招きし、指導に当たっていただいた。

ラートは、これまで筑波技術大学保健科学部から借用している。本体が大きいことから運搬が容易ではなく、輸送については運送会社に 4 t トラックを 1 台手配し、搬出や搬入には本校教員が現地で、

ドライバーと一緒にラートの出し入れを行っている。例年 8 台のラートと、両足をラートに固定するベルト（ビンディング）を借用している。

ラート運動は、日頃、経験できない姿勢や視界を体験できることから、本校生徒たちがとても楽しみにしている体験であり、長く継続することができている。

当日は初めての体験となる 1 年生が 2 時間、2、3 年生は前年の経験があるため、1 時間ずつで行った。1 年生は実際に間近で見るのも初めてということで、この日をとても楽しみにしていた。はじめに、天野先生の模範演技を見せていただき、イメージを作った。実際に回転する様子を見て、「無理だー」や「怖いー」などの声が上がった一方で、「面白い」や「早くやりたい」という声も多く聞かれた。

体験ではラートの縁に乗って重心を真ん中に置きながら歩くトレーニングから始めて、足を固定して横に揺らす動作、そして側転、後転、前転という順番で実技指導が行われた。回転すること自体に恐怖心がある生徒には、無理に回転までならずに、横に揺らす動作を楽しむようにさせた。各回転で大きなポイントとなる、目線、姿勢、ひじの使い方を意識してそれぞれの回転を体験した。

本校体育科教員が 4 名付いたので、身長別で 2 ～ 3 名のグループを作り交代でラート運動を行った。その際、安全面を考慮し、ベルトの着脱は必ず教員が行うようにした。

側転では、初期段階で恐怖心から姿勢が猫背になってしまう生徒が多く、そうした場合ラートに横揺れが生じ、横転する可能性があるため、同グループの生徒を前面と背面に配置し、回転と一緒に動くように補助させた。横揺れが生じた場合には、大きく揺れる前に補助の生徒に支えるよう指示した。

側転、後転、前転ができると、3 ～ 4 回転を連続で回り、最後には各回転を織り交ぜた連続技までできるようになる生徒が多かった。

2，3 年生は、1 時間という短い時間の中での体験となったが、これまでの経験から、すぐに感覚を取り戻し、連続技に取り組むことができた。



側転の練習をする様子

体験後のアンケートから、次のような生徒の感想が挙げられた。

・「体験できる機会が少ないので、とても楽しかったです。来年も楽しみにしています。」

・「回転できたときに、『やった！』『上手くできた！』という気持ちになり、うれしかったです。」

・「昨年も体験していたので、怖さが減りました。もっといろいろな技に挑戦したいです。」

・「最初は怖かったけど、どんどん楽しくなりました。またやりたいです。」

・「運動が好きなので、新しい運動ができてうれしいです。大好きです。」

**4. おわりに**

今年度も、車いすバスケットボールとラート運動の体験会を行うことができた。これまで小学部・中学部・高等部では、体験活動を実施することができているが、幼稚部での体験活動の実施ができていない。今後、体育科を中心に実施可能な活動を模索しつつ、継続できるものについては、継続していきたい。

# 生涯スポーツ社会への参加にむけた、オリンピック・パラリンピック教育の実践

附属大塚特別支援学校　　宇佐美 太郎

## 1. 対象と目標（ねらい）

(1) 対象

知的障害のある幼稚部、小学部、中学部、高等部に在籍する幼児・児童・生徒

(2) 目標（ねらい）

本校に在籍する生徒は全員、知的障害児・者である。

知的障害という障害の特性上、家庭・学校以外の場所に一人、もしくは友達同士で出かけることは少なく、幼児児童生徒の行動範囲が学校と家庭（最近では放課後デイサービスなどに通っている生徒も多い）のみに限られてしまうことが多い。また、興味関心が偏っていたり、ルールの理解が難しい幼児児童生徒が多く、自ら進んでスポーツに取り組んだり、情報を得たりすることも難しい。そのため健常者と比較すると、スポーツをしたり触れたりする機会は圧倒的に少なく、スポーツに関する知識も少ないと言える。また、スポーツを行うために必要な運動能力の発達に、健常者にはない未熟さや偏りが見られる幼児児童生徒も多い。

そこで、将来の健康的な生涯スポーツ社会への参加に向けて、オリンピック・パラリンピック教育を通して、①スポーツへの興味関心を高めること、②様々なスポーツを体験すること、③基礎的運動能力の向上を目標に、各学部で実践を行った。

## 2. 内容

(1) 幼稚部の実践

幼稚部に在籍するどの幼児も粗大運動・微細運動ともに発達に未熟さや偏りが見られており、幼稚部では、これらの発達を促す身体づくりを遊びの中で取り入れることを大切にしている。



写真 1. にじリンピック開会式の様子

昨年度より始まった幼稚部運動会『にじリンピック』では、日常的に取り組んできた遊具をつなぎ合わせて「サーキット遊び」を設置した。取り入れた遊具は、まず幼稚部プレイルームに一種ずつ配置して自由に遊べるようにした。始めから自主的によく遊ぶ幼児と、教員の促しによって行う幼児と当初の取り組みの実態はさまざまであった。『ウェイブバランス平均台』では、靴を脱いで裸足で歩くよう促すと、時折足を踏み外しながら足早に歩いていた幼児が、足を踏み外さないよう注意しながら慎重に足裏の感覚を意識して歩く様子が見られるようになった。また教員の支援が必要な幼児も歩幅が縮まり、足裏に接している面を踏みしめて歩く様子が見られるようになった。このような経験の後に「サーキット遊び」に設置したことで、どの幼児も積極的に遊ぶ姿が見られた。動きが少なく同じ場所に留まっていることが多かった幼児が自主的にさまざまな遊具へ挑戦するようになったり、動きの速い幼児が足を踏み外さないよう慎重に歩けるようになったりしたのは、このような取り組みの成果だと捉えている。

(2) 小学部の実践

このコロナ禍において、小学部では過去二年間、運動会を実施できないでいた。また本年度入学した 1 年生においては、運動会というものを経験したことがない児童もいた。

小学部では運動会はオリンピックと同じように、大会に向けて体育の授業などを通して体づくりをしたり、応援することや応援されることを経験しスポーツの楽しさを感じたりする、非常に有意義な学習機会だと考える。そのためコロナ禍ではあるが、本年度は規模を縮小して保護者にも参観していただけるように、「お楽しみ運動会」を実施することとした。

そのための学習として、小学部低学年ではコーディネーショントレーニングの要素を多く取り入れたサーキット運動を体育の時間に行った。障害から四肢を同時に動かしたり、バランスを取ったりといった体の調整能力の発達に未熟さが見られる児童が多く、トンネルやベンチといった低いところをくぐる活動や、平均台やバランスボードでバランスを取って移動したり静



写真 2. サーキットの様子

止する活動をコースに配置し、サーキット運動をおこなった。

また、友達のことを応援したり自分が応援されたりといった経験にも乏しい児童が多かったため、ペットボトルでマラカスを作成し、応援の盛り上がりを期待するとともに、声が出ない児童も積極的に応援に参加できるよう配慮した。

運動会直近の体育では、活動の見通しを持つことが難しい自閉症スペクトラムを併せ持つ児童に配慮し、本番と同じ環境設定を行い、本番と同じ手続きで指導を行った。応援活動も含めて指導・学習を行うことで、児童たちも声を出すことや音を出すことの楽しさ、自分の名前を呼んで応援してもらえることの嬉しさに、次第に気づいていく様子が見られた。運動会直前の練習になると、教師の声掛けを待つことなく、自ら声を出したりマラカスを鳴らしたりするようになっていた。

一方、「お楽しみ運動会」は当初 5 月に開催する予定であったが、社会情勢の影響もあり、時期をずらし 9 月 30 日に実施された。

本番では多くの保護者から大きな声援を頂いたり、児童同士もそれぞれの方法で応援をしあったりするなど、コンパクトではあったが非常に盛り上がった運動会となった。

児童においては、競技中の応援が非常に印象深いものであったようで、その後の体育の授業においても友達が走ったりしているときに、自ら大きな声を出して「○○さん、がんばれ～」と応援するのが常となっていた。本取り組みを通して、スポーツにおいてお互いにエールを送り合うというフェアプレーの精神が、小学部低学年段階で醸成され始めたのではないかと考える。

(3) 中学部の実践オリパラ

中学部では、今年度初めてネット型競技に取り組んだ。今年度は、生徒の誰もが試合に参加して、楽しみながら取り組めることをねらい、パラスポーツであるシッティングバレーを行った。

シッティングバレーを行うにあたり、イメージをもてるようにパラリンピックの試合の映像を見る時間を設けた。実際に生徒が取り組むことを考えると、通常のバレーボールだとボールが落ちるのが早く、生徒がボールに反応できないことが予想されたので、ボールは風船バレーで使う公式の物を使用した。また、ボールが地面に落ちても 3 バウンド以内に返せば失点にはならないといったルールの変更も生徒の実態に応じて行った。



写真 3. シッティングバレーの様子

その結果、生徒の誰もが参加し、1 試合で数回ボールに触れ、相手コートに返すことができ、試合をすることができた。何回か試合を重ねる中で、友達にトスをしてボールを繋いでから得点を狙う生徒や、ボールに気付いていない友達の名前を呼ぶ生徒など、自分以外の人を意識して試合に取り組む姿も見られた。

本取り組みでは、オリンピックやパラリンピックで行われている競技を参考にしつつも、生徒の実態に応じてルールを変更して実践を行った。そうしたことで、生徒の誰もがスポーツの楽しさや面白さを体験する機会を設定することができた。

(4) 高等部の実践

高等部は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会のメインスタジアムとして使用された国立競技場で、大会のレガシーが体験できる『国立スタジアムツアー』に参加した。

国立競技場到着後、東京オリンピック・パラリンピックでメダルを獲得した選手、チーム名が刻まれた銘板「トリビュート・トゥー・チャンピオンズ」を見学し、ピクトグラムからオリンピック・パラリンピック種目について話をしたり、メダルを獲

得した選手の名前、国名などを調べたりした。「この種目は○○だよ。」「この選手知っているよ。」「日本は…あった。」などと生徒がテレビを通して観戦した記憶を辿りながら、それぞれの思いを話しながら楽しむ様子が見られた。サインウォール見学では、他国選手のサインやメッセージを見つけて友達や教師と話をする姿があり、これはね…と教師が国名や書かれている内容、選手を紹介しながら解説する姿が見られた。世界の国々に興味が出てきている生徒もいるため、サインウォールを通して、さらに関心が高まったようである。フラッシュインタビューゾーンやロッカールームを見学した際には、表彰台へ上ったり、カメラにビクトリーサインをしたり、どの生徒も笑顔で、選手になった気持ちで取り組む姿が印象的であった。スポーツ選手のロッカールームを初めて見た生徒は、「こんな風になっているのですね。」「少し緊張してきました。」など舞台裏を見て、新たな発見があったようである。トラック＆フィールドに出ると、競技場の広さ、美しさに驚く生徒が多く、歓声が上った。トラックを思い切り走ったり、スタンドを撮影したり、空を見上げて美しさを感じ取る生徒がいた。また、展望デッキに上がる際には、競技場内に設置されている観客席や移動ルートなどに気づく生徒もいた。



写真 4．生徒がまとめた感想

昨年度に実施したオリンピック・パラリンピックの調べ学習、各家庭による観戦、アスリートとの交流を実施したことことで、今年度の取り組みは、より深い学びへとつながる学習になったと考えられる。東京オリンピック・パラリンピックの思い出を振り返るとともに、競技場に施されているレガシーを感じ取ることができたのではないか。

### 3．成果と課題

本年度も昨年度に続き、各学部で幼児児童生徒の実態に合わせた学習活動を設定し取り組みを行った。各学部の取り組みを概観してみると、その取り組みには各年齢段階における特徴が出ていたと考える。

まず、年齢層が一番低い幼稚部では生活の基盤であり、生涯スポーツに取り組むための基礎となる運動発達を促す体づくりを遊びの中で取り入れ、その発達を促すという、幼児期の発達段階にあった取り組みが行われていた。次に小学部では体育という授業の中で運動発達を促し、運動会という特別活動の中でフェアプレーの精神を醸成した。中学部の実践では、通常のパラリンピック競技の用具やルールを生徒の実態に合わせて変更したアダプテッドスポーツとすることで、生徒の誰もがスポーツの楽しさや面白さを体験する機会を設定することができた。さらに年齢層が一番高い高等部では、実際の見学やまとめ学習を通して東京オリンピック・パラリンピックの思い出を振り返るとともに、競技場に施されているレガシーを感じ取るといった取り組みが行われた。

本年度の幼稚部から高等部の実践は、幼稚部段階で楽しみながら運動発達を促し、小学部段階で運動発達とフェアプレーの精神を醸成し、中学部でスポーツへの興味関心を高め、高等部でオリンピックやパラリンピックそのものやその文化に親しむことで、生涯スポーツ社会への参加意欲を高めるといった、12 年間をかけて行われるスモールステップで構成された学習プログラムであったとまとめることができる。

しかし、本年度は各学部で独自に行われた取り組みをまとめたことで、一連の学習プログラムとして整理することができただけである。そのため、今後はこのプログラムが生涯スポーツ社会への参加へ寄与するべきものであるか、実践の継続と検証が必要であると考える。

### 4．今後の予定

昨年度、課題として挙げられていた、全校での取り組みはコロナ禍の影響により未だ実施できていないことが多い。今後の社会情勢を見守りながら、より大きな集団でのダイナミックな学習機会を設定していきたいと考える。

また、次のパリ大会が近づいてきていることを踏まえ、オリンピック・パラリンピック教育の内容を再考し、幼児児童生徒が高い関心を持ってパリ大会を楽しむことができるような学習プログラムを実施していきたい。

# 障害のある生徒のスポーツを通じた自立と社会参加に向けた実践

附属桐が丘特別支援学校　　寒河江 核

## 1. 対象と目標（ねらい）

肢体不自由特別支援学校である当校では、パラリンピック競技大会における種目であるボッチャについて小学部から高等部までの児童生徒を対象に体育・保健体育の授業や交流学習などで取り組んできている。また、既存の競技では十分に対応しきれない様々な実態の障害をもつ子ども達に合わせ、活躍の場を広げ、個々の能力を引き出し、心身を健全に育成するために考え出された競技であるハンドサッカーに保健体育の授業やスポーツ部の活動として取り組んできている。今年度は社会情勢の変化に対応して対外的な活動も緩和され、ボッチャやハンドサッカーの大会に参加した。ここでは、中学部・高等部のスポーツ部に参加する生徒に対して、生徒が主体となって活動できるよう障害特性に合わせた指導の工夫や教材の設定を行い、スポーツを通じて自立と社会参加に向けた取り組みの実践を紹介する。

## 2. 内容

今年度のスポーツ部は中学部 1 年生から高等部 3 年生までの生徒 25 名が参加した。2 つのボッチャ大会への出場、1 つのハンドサッカー大会への出場に向けた取り組みの中で、縦割りのグループを編成し、生徒同士が対話を必要とする場面を創り、関わり合いながら活動を展開した。高等部の生徒であっても、この 2 年間は校内での活動も制限があり、対面での活動の経験が少ないことでチームスポーツの場面において重要な要素の一つであるコミュニケーションがうまく取れないことも多く見られた。コミュニケーションについては障害に起因するものも考えられるため、運動観察の視点を示した上で運動観察を行ったり、映像を視聴したりしながら自分の考えを持つことができるよう指導を展開した。また、大会への出場を目標の一つとし、試合時間に合わせて行動するための自己管理の必要性についても考える場面を設けた。

## 3. 成果と課題

意図的に対話的な活動を設定し、継続する中で、次のような成果があった。ボッチャにおいては投球ごとにチームで「どのような投球を目指すのか」を話題にしたり、自チームや対戦チームの「残りの球数」に着目して作戦を話し合ったりする場面が見られた。ハンドサッカーでは、上肢に可動域制限がある仲間がより良くプレイするためにチームで合意形成を図り、プレイをサポートする言葉がけや動きが見られた。また、部活動という任意の活動の中で自分たち自身が動いていく必要があることに着目させることで、練習や大会に出るための送迎時間を保護者に依頼したり、大会をサポートしてくれるスタッフ、レフリーへの感謝の気持ちを伝えたりしながら活動を進めて行く生徒の姿があった。

一方、課題として生徒の実態が多様な中で生徒同士の関わりだけで進めて行くことが難しい場面での教師の関わり方の検討が必要だと感じた。スポーツを楽しむことを目的に集まる当校の部活動の中では、経験や技能の程度も多様であり、その中でも生徒が成長できる活動の設定を今後工夫していきたいと考える。



写真 1. ボッチャ大会の様子



写真 2. ハンドサッカー大会の様子

**4. 今後に向けて**

当校に在籍する児童生徒は、在学中のスポーツとの関わりは「する」ことを中心に「見る・支える・知る」といった多様な価値を体育・保健体育の授業の中で学んでいる。しかしながら、保健体育科が目指す豊かなスポーツライフの実現に向けてさらに力をつける必要があると考える部分もある。肢体不自由児が豊かなスポーツライフを実現するためには、在学中の体育・保健体育での学びに加え、対外的なスポーツ活動に取り組む中で、学校や保護者から離れ、社会や人とつながることも必要であると考える。今後もオリンピズムの考え方のもと、スポーツを通して心身を向上させ自立と社会参加に向けて取り組むことができるような活動の機会の創出を行っていきたい。

# オリンピック・パラリンピックの価値から振り返る久里浜特別支援学校の取り組み

附属久里浜特別支援学校　　遠藤 佑一

## 1. はじめに

本校は知的障害を伴う自閉症の幼児児童が在籍している特別支援学校である。また、児童の実態は興味・関心や言語の理解度など、子供によって大きく異なっている。

そのような実態の中で、本校では運動会やマラソン大会など、みんなで同じ場を共有しながら目標に向かって学習に取り組む活動が数多く設定され、一人一人が取り組むべきことが分かり、主体的に学習に向かえるように様々な工夫を日々行っている。

今年度、本校においてオリンピック・パラリンピック教育を行っていくにあたり、改めてオリンピックの中心的な価値として重視されている、卓越（Excellence）、友情（Friendship）、敬意 / 尊重（Respect）の 3 つの価値と、パラリンピックで重視されている勇気（Courage）、決意（Determination）、インスピレーション（Inspiration）、公平（Equality）の 4 つの価値について考えて実践に取り組んだ。

## 2. オリンピック・パラリンピックの価値における本校取り組みの工夫例

オリンピック・パラリンピックの 7 つの価値について、本校の指導に位置付ける場合、具体的な内容としてどのように考えられるのか以下に示した。

1）卓越：より高い目標を目指して努力すること
- ・勝敗が分かりやすいように工夫する
- ・上位入賞者等への表彰
- ・実態に合わせた目標の設定
- ・興味・関心を高める教材を使用することで繰り返し取り組めるように工夫する

2）友情：スポーツを通して得られる友情や絆
- ・チーム内で勝利の喜びを共有する
- ・チーム間でお互いの頑張りをたたえ合う

3）敬意 / 尊重：ルールを尊重する、フェアプレイに徹する、支えてくれる人たちに対する敬意
- ・発達段階に合わせた分かりやすいルール作り
- ・ルールの見える化
- ・興味・関心を高める教材を取り入れることで、主体的に活動に参加できるように工夫する
- ・支えてくれている人の紹介の場を作る

4）勇気：マイナスの感情に向き合い乗り越えようとする精神力
- ・スモールステップで成功経験を積み、自己効力感を高める

5）強い意志：難しいことがあっても諦めず限界を突破しようとする力
- ・具体的にどうすればできるようになるのか、見通しを示す
- ・興味・関心を高める教材を取り入れることで、失敗しても再度挑戦したくなるように工夫する

6）インスピレーション：人の心を揺さぶり駆り立てる力
- ・観客の前で活動する機会を作る

7）公平：多様性を認め、工夫すれば誰もが同じスタートラインに立てることに気付かせる力
- ・持てる力を使って目標が達成できるようなルールや実態差を補う補助教材等の工夫

## 3. 実践の紹介

上述したオリンピック・パラリンピックの価値を本校の実践に落とし込んで整理した「運動会（玉入れ）」と「体育（ボッチャ）」の 2 つの事例について以下に紹介する。

1）運動会（玉入れ）

①対象

小学部 1 年生から 6 年生

②実態に応じて取り入れた工夫例（関連すると考えられるオリンピック・パラリンピックの価値）

・終わりが分かりやすいように落ちている玉を全部
籠に入れ終え、自陣のベンチに座ったら終わりとする。（卓越、敬意 / 尊重）

・自分の投げるべき玉を認識しやすくするために一人一人の
手提げ容器（実態差を補う補助教材）を用意して、下に
落ちている玉を拾って入れるのではなく、各自の手提げ
容器から玉をとって籠に投げる。（公平）

・学年によって籠の高さを変える。（強い意志、公平）

・籠に興味・関心の高いキャラクターを付けて、
籠に注目できるようにしたり、意欲を高めたり、
ボールが落ちない補助材としたりする。（敬意 / 尊重、
強い意志、公平）

・巧技台に上って投げられる場所を作る。（強い意志、公平）

・学年によってボールの数を増やしたり減らしたりする。（強い意志、
公平）

・立ち位置を明確にするために地面にフープを置く。（卓越、
敬意 / 尊重、公平）

・籠に近付きすぎないようにフープで距離をとる。（卓越、
敬意 / 尊重、公平）

・ベンチに座ることが難しかった場合の代替案として
「座ること」と同等の意味を持つ個別の旗等を用意する。（公平）

・運動会でたくさんの観客の前で行う。（インスピレーション）

・勝ったチームを称えるとともに、一緒に戦った他のチームも労う。（友情）



写真 1．玉入れの様子

2）体育（ボッチャ）

①対象

小学部 4 年生、5 年生

②実態に応じて取り入れた工夫例

・すべてのボールを投てきし終えた後に所定の
場所に残ったボールの数で競う。（卓越、敬意 / 尊重）

・ジャックボールの周りにペットボトルを置き、
ジャックボールだけでなくペットボトルもターゲットにして
ボールを所定の位置に集めることができる。（卓越、強い意志、公平）

・投てきを交互に行う。（敬意 / 尊重）

・誰が投げる番かを視覚的に示す。（敬意 / 尊重）

・ジャックボールに近いボールがあるチームに
ジャックボールの得点が入る。（卓越）

・得点が分かりやすいように得点板を用意し、
得点となったボールの数を比較しやすいようにする。（卓越、敬意 / 尊重）

・勝利をチーム内で喜び合う。（友情）



写真 2．ボッチャの様子

**4. 外部講師による指導助言**

東京パラリンピックでボッチャ日本代表の監督を務め、現在一般社団法人日本ボッチャ協会の競技局長である村上光輝氏を講師として招き、本校の 4, 5 年生が取り組んでいる体育におけるボッチャを見ていただき、実態に合わせてルールを作っていく際のポイント等の助言をいただいたり、教員に向けてパラリンピックの理念と意義について実演を交えた講義をしていただいたりした。その中で、パラリンピックの価値の「公平」について考える場合、対象のスポーツの本質を損なうことなく、障害に起因する不利を補っていくという視点をもって、ルールを考えていくとよいという話をいただいた。そういう意味では、今回見ていただいた本校のボッチャの授業においては、ボッチャの本質の一つである、「ボールを狙ったところに集めていく」という点において、ターゲットとなるジャックボールという点を狙う活動ではなく、ペットボトルをジャックボールの近くに置くことで、面も狙ってボールを集められるという工夫を行っていることはとても良いのではないかとのことであった。また、パラリンピックの知的障害のカテゴリーについては、過去にクラス分けにおいて不正が行われたことがあるほど、その判定の難しさから、「公平」について突き詰めていくことに重きを置くよりも、いかに「インスピレーション」を与えられたかに価値を置いていく方がよいのではないかという考えを述べられていた。

**5. まとめ**

以上のように、オリンピック・パラリンピックの価値から本校で取り組んだ実践の一部について振り返りを行った。本校では在籍する知的障害を伴う自閉症の障害からくる特性である、限定的な興味・関心、複雑なルールの理解や状況に応じた判断の難しさ、衝動性やこだわりなどを考慮する必要がある。それらを考えていくプロセスの中で、どこまでを指導の目標とし、どこからは実態に合わせた工夫として補助教材などを活用するのかの判断には難しさがあった。村上先生の話の中においても、身体機能の障害であってもトレーニングやリハビリによって身体機能が高まったり、回復したりして障害のカテゴリーが変わってしまうことが、よくないこととされてしまうことがあることなど、いつの状態で実態の判断を行っていくのかの難しさも話されていた。

一方で本校に在籍する発達年齢に差がある集団の中で、オリンピック・パラリンピックの価値を意識し、みんなが「公平」に取り組める活動を考えていくことは、障害に限らず老若男女が参加しやすい活動の創出と共生社会の充実にもつながると考える。今後も本校の学習活動において「本質を損なうことなく、不利を補う工夫」を行いながら、オリンピック・パラリンピックの意義と理念を継承できるようにしていきたい。

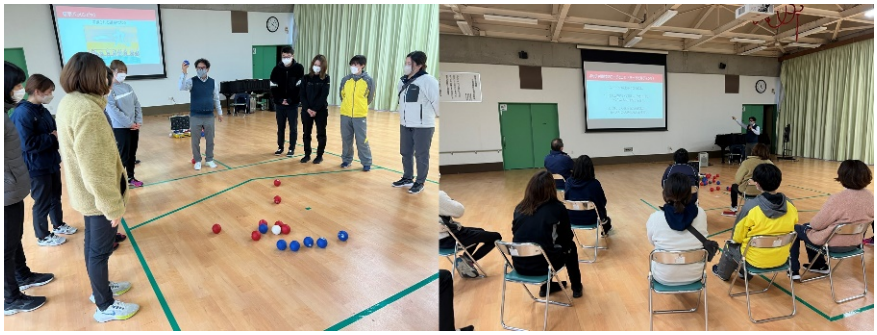


写真 3. 村上先生の講義

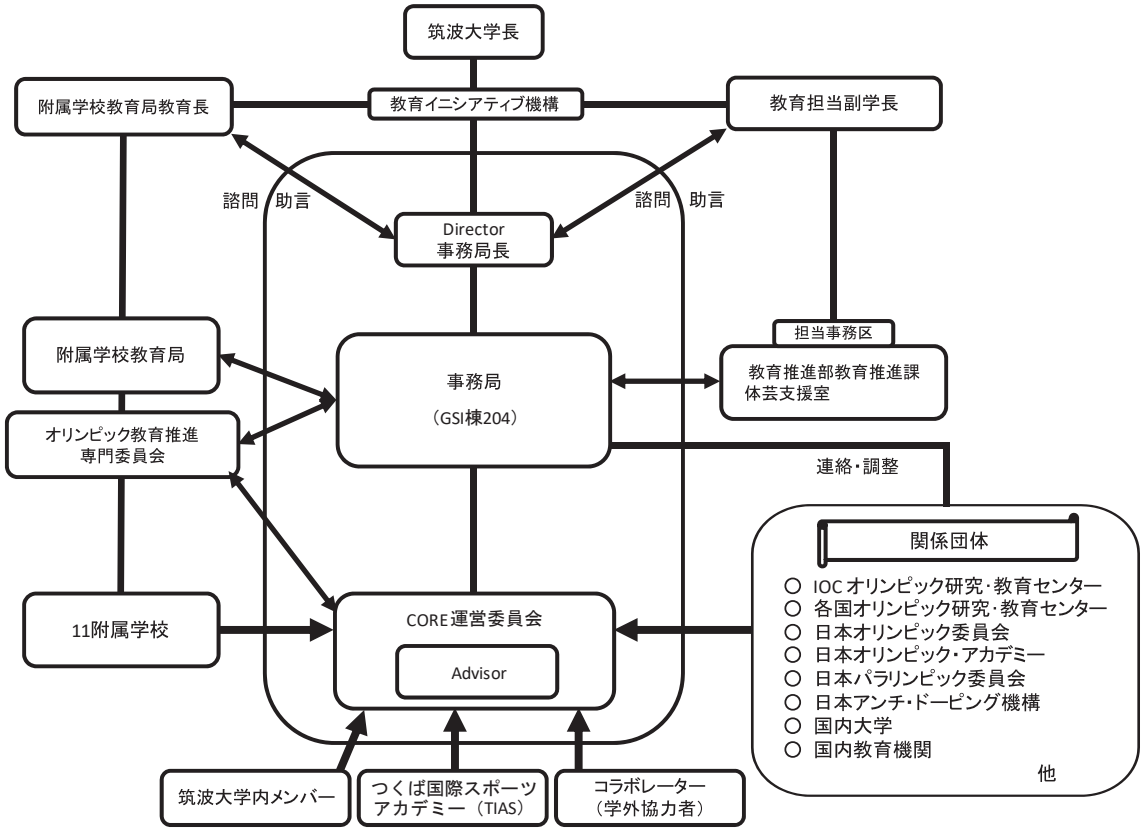
**参考資料**

日本体育大学　オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
スポーツ庁　オリンピック・パラリンピック教育推進に向けて最終報告
筑波大学　オリンピック教育プラットフォーム

## 筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（令和４年度）

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 溝上智恵子 | 附属学校教育局教育長 |
| 副委員長 | 星　　祐子 | 附属視覚特別学校長 |
| | 雷坂　浩之 | 附属学校教育局次長 |
| | 梶山　正明 | 附属学校教育局教育長補佐 |
| | 真田　　久 | 特命教授 |
| | 宮崎　明世 | 体育系准教授 |
| | 澤江　幸則 | 体育系准教授 |
| | 大林　太朗 | 体育系助教 |
| | 江上いずみ | 客員教授 |
| | 森本　隆史 | 附属小学校教諭 |
| | 秋山　和輝 | 附属中学校教諭 |
| | 鮫島　康太 | 附属高等学校教諭 |
| | 山合　洋人 | 附属駒場中・高等学校主幹教諭 |
| | 藤原　亮治 | 附属坂戸高等学校教諭 |
| | 山本　夏幹 | 附属視覚特別支援学校教諭 |
| | 荒川　郁朗 | 附属聴覚特別支援学校教諭 |
| | 宇佐美太郎 | 附属大塚特別支援学校教諭 |
| | 寒河江　核 | 附属桐が丘特別支援学校教諭 |
| | 遠藤　　佑 | 附属久里浜特別支援学校教諭 |
| オブザーバー | Benton, F.Caroline | 副学長 |

## 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図



オリンピック教育 vol.11 2022/04-2023/03

2023 年 6 月発行

発行者　筑波大学オリンピック教育プラットフォーム / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会
発行所　オリンピック教育プラットフォーム (CORE)　事務局
〒 305-8574　茨城県つくば市天王台 1-1-1　筑波大学 GSI 棟 204
事務局長　真田久